八　木　義　徳　戦　後　日　記

（　１９４６年5月１７日　～　１２月１３日　）

この三尺の道路の持つ「意味」――　極めて象徴的だ．　運命」以上に．

五月十七日 午前七時　品川着

品川から東中野へ

新宿駅に来た時、もう「観念」した。見渡す限りの焼野原。

とても見込みはない．しかし、それでも　まだあきらめない）―― 大久保．

完全に焼けてゐる．　まだ　あきらめない．）

あきらめぬ証拠 ―― 東中野駅に下車．　駅前に立つ．―― 見事な

焼土―― 歩き出す．白いコンクリートの道．いやに白い、その白さがヘンに

気になる．

家の見当を全く失ってゐる．―― 道路のすぐそばにタイル張りをした幾坪

かがある．これが「阿部床」の焼跡であった．曲る ―― 田中病院の門柱

そして、自分の家 ―― といふより、小さな野菜畑．青く伸びた麦と葱 ――

これが「わが家」であった。―― 五月二十五日夜の空襲。

町会事務所をひとにきいて訪ねる．―― 意外な待遇を受け驚く．

朝飯の御馳走．

西荻窪へ ―― 庵原の母さま、いく子さん、芳久さん、直久さんの夫人の

久代さん ――

りよ子と史人の死を知る．

三月十日前三時頃、本所にて。本所の母の取手へ行った留守。

光一、より子、のり子たち共に．　春二のみ助かる）

全く予想も（夢想だに）しなかった出来事、考へてもみもしなかった．

出来事を知らされた時の反応の仕方 ―― 無感動と無表情．

ひとごとのやうにきく．

この出来事の「実感」をまだ感じないのだ。

昼飯、風呂、甘いもの．―― 鶴見へ．

兄、嫂、母と秀子、猛と烈．―― 対面．皆無事であった。

五月十八日．

「生活」がはじまる．

山本、紅谷、高橋[敏]、浜野へ便り．

五月二十日．

須永、永峯、浅見、川本、平野へ便り．

この日帰還第一回のマラリヤ．　以後頻繁なり）

五月二十一日．

会社へ顔を出す．知った顔はほとんどなし．浦島なり．

人事課八木久さん戦死の報をきく．

鉄道博物館三階の文化事業部へ．　秋田課長、石井、鈴木の

諸兄．　女三人は戦時中やめたとの事）

今さんにも会ふ．　高橋[英]ちゃん（支社文化課）にも会ふ．

本社文化事業部弘報課勤務となる．

十日間の休暇を貰う

五月二十二日

鎌倉文庫に北條君を訪ねる．―― 友人たちの情勢をきく．

横光先生をお訪ねする．―― 御無事で居られた。

数々の有難いお言葉を頂く．

松村泰太郎さん来り こゝで会ふ．

（山本の熊本へ帰ってゐることを知らされる）

三人で、先生の最近発見したといふそばやへ行く．生憎店が閉まって

ゐる．喫茶店でコゝアとホットケーキを御馳走になって帰る．

五月二十三日

取手に本所の母をたづねる．

この母がいちばん気の毒であった．しかしこの母は「不幸」にはもう

なれきつて了つたのだ．ひとごとのやうに語り、ひとごとのやうにきく．

却つてこの方がいゝ。

一泊．

五月二十八日.

横光先生をお訪ねする．兄が都合してくれた北海道のバター少々お届けする．上らずにすぐ浅草へ、塩浜との約束を果すためなり.

しかし．―― といふよりやはり、姉上の家は焼けてゐた.

わづかに六区の映画館だけが奇蹟のやうに残ってゐた。

例の昔の病気がおこる ―― 何故浅草だけが自分にこのやうな「病」を与へるのか ―― 焼跡に立ってゐると、涙が出て来た.

この特定地域に於ける特定の反応 ―― 浅草は不思議なところだ.

大勝館「ロイドのエヂプト博士」―― 笑へたら笑ひたいといふ欲求を感じて、入つてみる． どうやら一度みたことがあるやうだ）

〇〇〇〇〇〇〇〇 映画といふ奴は一度きりのものらしい.

折角のロイドも白々しくて笑へず.

むしろ、ニュースの方が面白い.

ドイツ、スパイの処刑　銃殺と絞首.

ニュールンベルクのドイツナチス領袖の裁判（ゲーリング、ヘス、リツベントロップ、ローゼンベルク、カイテル、等、皆 無罪を自宣する．）

五月二十九日

山本、塩浜へ手紙.　　小林邦二兄

（五月二十五日．硎野中隊長、高栖曹長へ手紙.）

武者さんの「美術論集」読了.

トルストイ「戦争と平和」読みはじめる． 第四回目なり）

トーマス・マン「自伝」読了.

五月三十一日

兄と二人、千葉県上総一ノ宮へ買出しに出かける． 兄、千葉在隊中の知人にて田中といふ歯科医兼富農 〇〇〇〇〇 及び軍刀を預けありといふ他の人）

米七升、さやゑんどう、いんげん、大根、ごぼう、甘藷など.

列車大混雑、買出し緩和令も今日が最後の日なる故か.

六月一日（土）

浜野を訪問、浜野の顔はむくんでゐた．半年越しのマラリヤの故といふ．

お千代夫人は健在、留守中の厚意を心から謝する．ホットケーキを三枚も

紅茶に純粋アルコールを入れたのをのませられる．　　焼いてくれる

夕飯を御馳走になる．―― この夫妻の限りない善意。

童話を書いた由．―― 浜野の楽天主義 ―― 羅漢とは応供なり ―― 一切を

そのまゝに受け取るといふこと― 感謝をもつて受け取るといふこと、なる由．

人間を信ずる信じ方．

「人間」といふもののたつ最低基盤まで下降してみること ― そこからは上し

か見えない（最低の場に立つ故に）― 本質的な明るさといふものもこゝから

のみ中途半端を警戒せよ．―― 飾りをみんな削り落してみよ。

大井線（大井 ― 二子玉川）にて帰る．

のり子さん心づくしの甘味が待ってゐた．まんじゅうとどらやき．　甘藷と

と~~いんげん~~（そら豆）のあんこ（まめ）なり）―― 善意！　善意！　善意の世界 ――．

六月二日（日）

日響「第九シムホニー」の切符を買ひに銀座に出る．生憎三越は日曜日にて休み．

銀座は全くイヤな街になった．インチキもののはんらん、そして進駐軍用の

お土産品 ―― 昔の神戸元町みたい．―― と称する品々．

ここでは一ぱいのコーヒーものみ度いとは思はない．

高橋敏君を訪問、不在なり．母上と京子夫人にのみ挨拶して帰る．

疲労甚し．

鶴見駅前の風呂屋に入る ―― 帰還後庵原家での入浴以来の入浴なる

平野氏よりハガキあり．

六月三日（月）　曇．

兄と二人で川崎の鋼管病院へ、歯の治療のため．

本間先生に紹介され、その治療を受く．　上二、下二、ほかに全般

的にわるくなりつゝある状態なる

本間先生は親切なる人なり．

銀座三越へ．―― 「第九シムホニー」の切符は売切れてゐた。

本社人事課を訪ね定期券を請求、文化事業部に秋田課長を訪ね
出社予定日と歯の治療につきて報告 —— 更に七日までの休暇を貰ふ.
山本悟より長文の書翰来る —— いつに変らぬ悟さん. —— これは神様だ.

× × × ×

乗物の中にある時、街を歩いてゐる時、ひとり在る時 —— りよ子と史人
のことを考へることが多い.
この二人のものの死 —— 自分は案外深傷を負ってゐるやうだ。
第三者を全く顧慮せずたゞ自分自身に対してのみの公開状を書くべし.

× × ×

ひどい疲労 —— 精神の「復員」はまだのやうだ。

六月四日（火）　雨. 夕方美しく晴れる。
今日は一日どこへも出ぬ決心をしてゐるので気が落ち着く
田中、森、北、神戸、粕谷の諸氏にハガキ書く.
昔はたてつゞけに二十枚のハガキ書いても疲れを知らなかつたが
この頃のこの疲労はどうだ.
頭の芯がうづき、気がついてみるとひどく体を斜めにして字を書いてゐる
突然吉岡の細君の訪問を受ける. やはり心配だったのだ.
決して心配することはないとくどくと言ふ — どうやら安心された風だった
大根のお土産.
「夫婦」といふものを更めて考へさせられる.
浅いやうで深く、深いやうで浅い. この不思議なきづな。
藤沢恒夫の随筆集「大阪の手帖」読了.
窪川いね子の「素足の娘」読了.
もう少しシツコくやって欲しかった。— ユイスマンスの「逆に」のあの描写
つゝこみとねり！　淡彩よりも油絵で.
兄が素晴らしい本を会社の同僚から貰つて来た
眞船豊の「梅原龍三郎」

かく者とかゝれる者のこの取組み！　絶好だ。
肉迫の仕方、深入りし過ぎるほどの深入り．完全に相手の体の中
へ自分の体をめりこませてゐる．
といふよりも㊀全肉体と全精神のこの完全な置換！
一つの秘訣。これだ。
熱中といふこと、そのものを前に置いてこれを客観するといふのでない．
そのものに成るのだ．そのものに成らうとする努力だ．

六月五日（水）　曇 後 晴．
歯の治療．本間先生は果して(一昨日、兄に言った如く)北海道の人であった。
斜古丹半島の古平だと言ふ
何か最初からこのひとに親近感を感じてゐたが果してさうであった．
「劉広福」の載った文春を鶴見駅前の古書店でみつけ買ふ．五十銭なり．
眞船豊「梅原龍三郎」読了．
この驚くべき傾倒の仕方．　㊀㊀㊀㊀㊀㊀㊀㊀㊀
×　　×　　×
「絵画以前」を一切解決して了って、その終ったところから梅原は第一筆を
放つ。　考へながらかかないといふこと．
「自然」とは何か．―― これを何度も考へてみよ．
石川達三「結婚の生態」読了．つまらないものた．この主人公とこの妻、
鼻もちならず、読後不愉快．
歳時記すこし読む（一月の部）
　　曳く裾に足袋先そりて春著(はるぎ)かな　　みさ子
㊀㊀㊀㊀㊀㊀㊀㊀㊀㊀㊀㊀㊀㊀㊀㊀㊀㊀㊀㊀

六月六日（木）　曇
茶山(緑)、山本悟、塩浜に手紙書く．
芳久君来訪
塩浜君より来信．

六月七日（金）　晴

歯の治療　今日は神経をとられた．

母及猛と総持寺へ、思つたほど俗悪でなかった．

道ばたの地蔵に小石を積む 母の曰く「史人のために」と、危ふく涙せんとす

高橋敏君よりハガキ．神谷みつ子氏（正夫君の妹さんなり）より手紙来る．

六月八日（土）　晴

会社へ行きパスを貰ふ．弘報課勤務の辞令もいつしよに出る．

実業之日本社に倉崎を訪ねる．宮内及十返（これは初対面）も来り

共に明菓にて茶を喫む

倉崎と共に後楽園球場の職業野球を観る．　こゝへ来るのははじめてなり）

巨人 対 タイガース　　五 対 〇

阪急 対 中部日本　　五 対 一

見物の進駐軍の連中　一打者毎に賭をしてさかんに「新円」のやりとりをしてゐるのが面白かつた．―― 面白くないものを面白くする方法。

母は猛と共に三浦御崎の秀子のところへ．

夜はまたのり子さん心づくしの甘味．―― まんじゅうときんつば。

十時頃まで兄と三人話しこむ．

どこへもつとめず書けと言はれる．―― 兄及び嫂のこの厚慮に軽ゝしく甘へてはなるまい．―― 自分の内部がまだ充実してゐない．すこぶる不安である．

この不安感は結局また自分の内部の空虚さから来てゐるのだ．

書きたいことが溢れて来れば会社など行きたくても行けぬようになるであらう．　時よ、速やかに来れ！

小林邦二兄及び山本の節小母上から手紙来る．　小林からの手紙は

何となく来てゐさうな予感があった）

二つともいゝ手紙でうれしかつた．

小林は彼の創元会出品の「二重像」の絵ハガキ（但し色彩なし）とコローの「ナポリ」(三井コレクション)を送つてくれた．　これは前の手紙に自分が

手紙といつしょに

此頃コローが好きになったと書いてやつたからであらう）．
小林の「二重像」はいゝ絵だ．　〇〇〇「精神性」〇〇〇〇〇〇
人物画たが「精神」が実によく出てゐる．画格が高い．
構図もいゝ．人物の手など実にうまい．ポーズもよく考へられてゐる。
色のないのが残念だ．
小林はきつといゝ絵かきになると思ふ．―― 心強く、且つうれしく思ふ．
（この絵は創元第二賞を獲た作品である）

×　　×

トルストイ、 戦争と平和」 アンナ・カレーニナ」
ドストエフスキー「カラマーゾフの兄弟」
トマス マン
プーシキン　　その短編
メリメ
フローベル
志賀直哉、?外 、漱石、
ヴァレリイ、
ジイド、
小林秀雄、

×　　×

個性的の独創的であらうと努むる勿れ ―― それは却って逃げて了ふ．

六月九日（日）　晴

庵原家へ預け荷物を取りに行く．
正さん、久ちゃん、芳ちゃん皆に手伝つて貰い行李三個チツキにて出す．
話しこみ夕方帰る．
夕飯はカレーライスなり．ほとんど一年ぶりの豚肉の味、薯(いも)は自家製の新ジヤガなり．その感触のやはらかさ．
塩浜より手紙、結婚と恋愛とについてこちらのアドヴァイスを求めて来た．
愛人は体が弱いといふ ―― 「反対」といつてやるつもりだ．

庵原家から古原稿持つて帰りあらためて読み直してみる．―― いづれも
再読に堪へず．キザなり．歯の浮く如き羞恥感
すべて御破算なり．
前方を見るべし．
表現は羊羹なり．ネレばネルほどテリが出る．
× ×
空白の時間と空間とを「文学」にて限定するこの作業、
あらゆる戦術を用ふべし．

六月十日（月）　晴．
出社．各課への挨拶、当分はフリーランサーなり．
多田からハガキ、来てゐる．
塩浜に手紙書く、七枚、 反対」を表明．
チッキ三個とゞく．
芳久君来訪　コーヒーの件
風強し．――

六月十一日（月）　雨 後 晴
歯医者、今日は前歯の神経をぬかれた．
肉体的な苦痛に対するこの極度の嫌悪、極端な臆病さ．
出社、ポストのない気楽さ、そして味気なさ．
人間は「自由」を欲しながら　また「檻」をも望んでゐる．
自由とは自分を限定することか．
浅見さんひよっくり訪ねて来て下さる．
好意あふるゝ御忠言、身に沁む．
ビューローを止める決心を最後的に固める．
コーヒーとお菓子、うなぎをごちさうになる．
打算といふものの全くないこの人間と人間との関係
これ以上貴ぶべきものは、ない。

帰って来て、兄と嫂に、ビューローを止め書く生活に入ることの希望を打ち明け　全面的な支持と快諾を得る.

またしてもこの善意の世界.

これでは全く人生に甘へたくなるではないか.

×　　×

「母子佛」
「遺言状」　すこしづゝ固まりつゝある

×　　×

兄と二人すこし酒のむ（但し自分はちよこに三盃）

小林邦二に手紙書く　五枚.

彼の「二重像」礼讃。

×　　×　　×

出発の時来る。

×　　×　　×

集中と解放.　　解放と集中.

六月十三日（水）　晴

課長に会社を辞めたい旨申出る.

「きみは外に伸びて行く道のあるひとだから止めない」といふことで内諾を得る.　　もうあとは正式に辞表を出すだけとなった.

俄かに身軽くなつた.

永い間憧れてゐて、とらへる事の出来なかつたこの「自由」!

ひとりでに笑ひたくなつて来て困る.

あゝ、これが自由といふものだ.

そうしてこれからの一切は全部自分たゞ一人の責任に於てなされるのだ.

自分たゞ一個の責任 ― 何もかも自分が自分一個に対決させられるわけだ.

人生といふ座標軸の上で「自分」がどういふ軌跡を画くものか.

ともかく正直に ―― そうだ正直に動いてみることだ.

この「自由」はりよ子と史人の死によってあがなはれたものであるといふことを忘れるな.

この高価な「自由」を粗末にしてはならぬ.
これはりよ子と史人との自分への贈り物なのだ.
りよ子、史人よ、
　　ありがたう、お前たちの生命とかけ替のこの贈物を心から感謝して
　　頂だいする.
倉崎を会社に訪ねる　不在なり．銀座から日本橋に出、そこから本所の
焼け跡を視に行く．
門前仲町のりかへ（昔のやうに白木屋前から錦糸町行といふのはなくなつた）
しばらく待ったが電車は来ないのでそこから森下町まで歩く
道路の両側は見渡す限り焼けてゐる.
見当を失ひ 通る人 通る人毎に道をきく.
子供二人をつれた若い母親に、―― 「わたしの一家もこのあたりでみなやられました」　　新しく建った洋服仕立屋の若い男「自分の父もこゝで死んだ」
（この青年は復員の兵隊、その友人らしいのがこれも今日復員(中支蘇州から)
して家と、一家族全部焼死した由、自分も中へ入り腰を下して　　第十三軍
いろゝと当時の模様をきく）
森下町の四辻へ出たが、また方角を誤り、交番の巡査にきゝ、ひき返す.
本所の家の隣組長結城氏の家（仮屋）を教へられそこを訪問.
当夜の模様を詳細にきく.
~~りよ子、史人は、~~大正湯の煙突の周囲で約二千人の人間が死んだ由.
りよ子、史人も恐らくこゝで死んだものとして、二人の遺骨はこゝから拾った由.　（しかし、晴二は二人と孝一、㊀㊀より子、のり子たちを中和小学
校の門の前でみたといふのだからこれは間違ひ~~なら~~だらうと　　㊀菊川町の
思はれる．）―― しかし彼等の骨をどこで拾はうとそれはモンダイではない
同じ運命によつて死んだひとたちの骨なのだ．因縁を相等しく㊀する
ひとたちの骨なのだ。
どのやうな骨であらうと、りよ子、史人の骨と思ってよろしいのた.
結城氏はいかにして火の中から生き返られたか．― 土を爪でかきほじくつて
その中に顔を埋め、両手でちようど水をあびるやうに土をあびつゞけてゐた
といふ

まだ癒りきらぬ

そのやうに語る結城老人の両手は火傷の跡が生々しかつた.

タバコ、茶など御馳走になり厚意を謝して帰る.

× × ×

りよ子、史人への鎮魂歌はどうしても書かねばならぬと帰途決心する.

× × ×

母子佛は母子鎮魂としようと思ふ. なくては出来ない贈物だ.

山本悟から小包（甘藷の粉、タバコの洋木、ねんどう豆、アテブリン）彼で

六月十四日（金）

歯の治療.

実業之日本社に倉崎を訪ねる. また不在なり.

野村證券に行き例の信託の債券について質ねに行く.

「配当金~~受取りなど~~などお留守中貰つてゐましたか」といふ若い女の事ム員の問しに「配当金なんかどうでもいゝんです」と答へたら同僚と顔を見合はせてクスクスと笑つてゐた.

こういふところは苦手だ.

こういふところの扉を押して入る時には何か罪を犯してゐるやうな羞恥感がつきまとふ.

再度、倉崎訪問. 不在.

銀座で茶をのみもう一度訪ね、やつと会ふ.

別に用事もないのに何故こんなにシツコク倉崎を訪ねたか.

差し迫つた 自分で自分の行動の制馭ができない場合がこの頃ひどく多い.

これなどもそれた.

急に横光先生に会ひたくなり、そこから地下鉄で行く.

館（たて）といふ画家が来てゐた. 近日、日動画廊で出すといふ絵を二枚、応接室に並べ先生の批評をきいてゐた.

創元会の会友の由 —— それなら信州の小林と同じなので、小林の名を出すと、まだ会つたことはない由、最近会友になつたばかりとのこと.

館氏の帰つたあともまた一人のこつて、いろ々お話うかがう.

ビユーローをやめたこと報告.

新潮六月号の小説 藤原審爾といふ人の「永夜」と坂口安吾さんの
「白痴」といふ二つとも面白いから読んでみよとて、これと「人間」
四月号二冊お借りして帰る．（旅愁」お借りしようと思ってお話したが
（あんなものよむ必要ないよ）と言って貸して下さらなかった．）
ヤスリをかけなければダメだから」と言はれる．
奥さまにも「顔色がたいへんよくなつてほんとに結構です」と言はれる．
ありがたいことた。

× × ×

ビユーローをやめることについて母には直接話さないでゐたが（母が不安がるだらうと思ふと言へなかつた）兄か姉にきいたものらしく、 ドんどん書きなさい」と言はれる．

× × ×

これで一切の道具立は完全にそろつたわけた．

× × ×

田中良三氏へ出したハガキ行転居先不明で戻つて来た．
若林君からハガキ来た．

六月十五日（土） 晴．
ラヂオで早慶戦を聴く． 四 対 〇 で敗ける．
終日家居

× × ×

「母子鎮魂」は話しかけの形式にするつもり．

六月十六日（日） 晴．
「母子鎮魂」書き出してみる．一日かゝつてやつと三枚、しかもまだ不満だ．
こういふ性質のものは、出来るだけ抑制した方がいゝのか．
それとも、感情の赴くまゝに流した方がよいのか．
腰がハッキリ決まらぬので、文章のリズムがちぐはぐになる．
もう多度やり直しが必要だ．

浜野、高栖[千代松]、北氏から手紙．
（浜野、早文八月号に短篇一つ書けと言つて来る）．

六月十七日（月）　晴．
兄と嫂と三人で邦楽座へ「カサブランカ」を観る．
兄たちと別れ、浜野を訪ねる．
彼は「お城の木」といふ童話を書いてゐた．―― 天皇敬慕の諷刺[暗]がかくされてゐる．すこぶる楽しいと彼は言ふ．
自分にはとても童話なぞ書けさうもない．
また、今は書き度いとも思わぬ．
いまはうんと生臭いものが書き度い．
いつしよに風呂に入り、夕飯を御馳走になつて、夜六時半頃辞去．

六月十八日（火）　晴．
歯の治療．
文芸春秋社に鷲尾さんを訪ねる．　芥川賞の挨拶に行つた方がよいといふ浅見さんと浜野の言葉に従って．)鷲尾さんは未だ出社してゐず．花房氏と池島氏にお目にかゝる．自分のことを知ってゐてくれた．また、りよ子のことも．
お悔みを受ける．
二人とも、気取りのないいゝひとた．清潔な顔をしてる．
芥川賞の副賞を貰ふ．河井寛次郎氏の焼いたやきものの大きな硯。
（箱に、鉄茶焼と書いてあつたが、やきもののことはてんで判らない．）
色は実にいゝ色だ．　しかしこの色が何といふ色なのか、それも判らない）
（~~これはりよ子や光ちゃんが貰~~これは今まで貰はずにあつたもので、社に保留して置いてくれたのだ）
万世倶楽部に久ちやんを訪ね、コーヒー二ポンド渡す．
支社に高橋[英]ちやんを訪ね、久ちやんと久代さんからたのまれた上田行の切符たのむ．　ビユーローをやめたことも話す．硯も見せる．

ひどく暑い、そしてひどく疲れる　頭が痛む．帰って来てすぐ寝る．
多田来訪、―― こゝへ来て、最初のお客さんだ．非情に血色がいゝ
帰って来て一回しかマラリヤ出ぬといふ ― 多田は親切な、気前のいゝ男だ．
九時、駅まで送る．

×　　×

「戦争と平和」読了．
これは今度でたしか四回目な筈だが読めば読むほど深さの出て来る小説だ．
全何といふウマさ、―― 全く小面憎いほど完璧だ．
どの人間も皆生きてゐる．それ自身として各々独立に生きてゐる．
ヒーローやヒロインたちはもちろん、何でもない端役連中がまた実によく生きてゐる．
どうしてこのやうに、人間のかき方がうまいのか．　書かうとする
（どうやら、この秘密は作者の腕にあるのではなくて、人物に対する作者の愛の深さにあるもののやうだ）
このやうな大きな小説を読むと、個性だとかスタイルだとかいふことで頭を使ふのは何だかバカ臭くなる．
作品を支へるものは思想だといふ気になる．
小説の場合の「美」といふのは作者がいての中に展開してゐる思想の美しさだ．
言葉の美しさではないやうだ．　では鏡花のやうな場合はどうか．？ ―― 同じことだ．）

×　　×　　×

すぐつゞいて「アンナ・カレーニナ」にとりかゝる．

×　　×　　×

その小説がよいか、わるいかは、その小説が何遍繰り返して読めるかといふところに在る．
いゝものは、いゝやきもののやうに、くり返せばくり返すほど味が出て来る．

×　　×　　×

「帰来数日」 早文９月号）

六月十九日（水）　晴．　曇．雨

早文八月号に載すべき短篇（二十枚 ― 二十五枚）の構想．

兄の例の遺言状からヒントを得たもの．

すぐ書き出してみる．―― 言葉が浮いて流れる．しかしこのまゝ終りまで流してみることにする．

今日一日で半ペラ十五枚書けた．

昼食後猛と二人、橘女学校の方へ散歩に出かける．途中でまた頭が痛くなったのですぐ引き返して寝る．―― わるい癖がついたものだ．

兄より「新生」六月号を借りて読む．

荷風の「罹災目録」―― 二十年九月一日より十二月三十一日までの分なり．

これにのつてゐる舟橋聖一の「その一日」といふ小説は全くひどいものだ．

汚ならしい、安手で軽薄でしかも薄汚い、話にならない．

~~虹が立つた~~。

今日は晴れたりくもつたり雨になつたりまた霽れたりくもつたり雨つ(ふ)たり― 終日

陰晴定めがたいアイマイな天候であつた．― 前の森の上に美しい虹が立つた。

福井に疎開中の多田さんからハガキ．

軍隊の給料の残り二百三十二円が振替で送られて来た．封鎖拂だ。

逸見先生に帰還挨拶のハガキ出す．

夜カレーライスを大皿に二はいもお代りをした故かひどく胃が重い．

金

六月二十一日（~~木~~）　晴．

早文の小説書きつゞける．しかしピッタリ来ない。女を主人公にして女の側から書いてゐるため、どうも、ピッタリしない．浮いて空廻りな言葉ばかりのやうな気がする．

これははじめからやり直ししなければいけないやうだ．

半ペラで十七枚まで来たが、これはダメだ。

×　　×　　×

粕谷氏来訪、これで二人目のお客さまだ。コーヒーと砂糖をもつて来てくれた。二人でのむ．

自分に、もう一度女房をもたないかと言ふ．軍隊に居る時きいた熊谷
の飛行学校にゐた従弟の妹だといふ．
親切はありがたいが、その気持ないとて断はる．
今の自分には全くその気持はない．
いつしよに送つて出て駅前の支那料理屋で天丼をコーヒーをまたおごられる．
竜ヶ崎行の切符をたのまれる．

六月二十二日（土）　晴．

別な小説にとりかゝる．帰つて来て数日間の自分の心境を主にしたもの．
（実は前の小説を書き直してゐる中に、突然こんな風になつてし
まつたのだ．私を主にして私の側から書いてゐる中に、例の遺言状
のことなどどこかへ行つてしまふやうなことになつたのだ．）
しかし、これはこれで仕方がない．自然にさうなつたのだから、恐らく
この方が正しいかもしれない．
これも行くところまで行かせてみることだ．
主題をはつきりつかんで、それを構成するといふことがまだ出来ない．
頭がわるい ―― といふより、弱いのだ。
ヴァレリイの頭を想う。
兄から借りたスクラツプ（昭和十六年頃のか）を寝ながら
読む．面白くてほとんど夜明近くまで読む．

六月二十三日（日）

「帰去数日」の稿をつゞける．一日かゝつて半ペラ二十八枚まで
すゝむ．もうヤマは見えた。これは終りまで行けさうだ．
気にしてゐた、山本の節小母さんに手紙書く。
「世界」の創刊号と「人間」の五月号読む．
世界には志賀さんのものがのつてゐるので大いに期待してよんだが、
余りに短かすぎ、余りに呆気なさすぎて失望した．
もつとながいものを書いてもらひたいものだ．
「暗夜行路」とまで行かなくても、せめて「和解」くらゐのを。

日本の小説家の老い易さ ―― 西洋の作家のやうに、六十になつても七十に
なつても、いつまでも人間くさく、やにつこく、しつこく、何かにぶつかつ
て行けないのだ.
すぐ枯れて、淡々と、 人間」を離れてしまふ。
荷風は例外のやうだが、荷風は、はじめから「人間」なぞモンダイに
してゐない作家だ。
小説はあらゆる芸術の中でもつとも俗な芸術だといふことをハラに
入れて、俗をはなれぬことだ。
夕飯後、猛といつしよに三ツ池の方に散歩に出る. また頭が痛く
なつてすぐ帰る.
どうして、外へ出ると、こうなのか.
浅見粕谷氏にハガキ出す.
母が三崎から帰つて来る. 兄も金沢八景（小机まで廻つた由）方面の買出か ら手ぶらで帰って来た。

六月二十四日（月） 晴.

歯の治療。右の奥歯、相変らず痛むので本間先生に訴へる.
歯根膜炎かもしれぬといふ。アルバジルを服めといはれる.
会社に高橋英ちやんを訪ね、粕谷氏から依頼の切符都合してもらふ
先日たのんだ久ちやんの上田行の切符、まだとりに来ないので心配して
ゐたところだつたと言ふ 昨日は日曜たが、約束なのでわざゝ出社して
一日待つてゐてくれた由.
英ちやんと二人 丸ビルの明治製菓でコーヒーとゼリーを食ふ。
万世銀座の三越に行き日響の特別公演の切符二枚買ふ.
嫂といつしよに行くつもりだ.
これから毎月嫂をひつぱつて行くつもりだ.
ワーグナーの「リエンチ」序曲、ヴェートヴェンの「ヴァイオリン協奏曲」
ボローデインの交響楽二番、
巌本眞理のヴァイオリンが楽しみだ.
日本橋の万世倶楽部に久ちやんを訪ねる. 生憎今日は休んで
ゐるとの事、女の子に切符を預けて帰る.

日本橋へ出たついでに宮川を訪問、これもまた不在、学校が休みで
あつた.
創元社に泰太郎さんを訪ねるつもりで日本橋の三越の方に歩き出したが、
結局どの辺にあるのか記憶を失くしてしまつてゐるので、あきらめて帰る.
ある、いたずらな心から鶴見を通りこして桜木町まで行く.
着いてからバカらしくなつて、プラツトフオームにも出ず、電車にのつたまゝ
でまた逆戻り。
この衝動は殺せば殺すほど生命がながいのだから、―― ジイドの
「抵抗もまた一つの立派な行動です」といふ言葉を思い出す.
安藤にて、コーヒーをゆつくりとのみ帰る.
フロベールの「三つの語」の中、 まごころ」を車中で読了
また改めて感心する. 涙が出た。何べんよんでも、このフエリシ
には説かさ~~やら~~れる. ―― この小説の終りの、場面は鮮やかに象徴になつてゐる。恐ろしい手腕だ.
自分が泣いた小説は、―― これと、 カラマーゾフの兄弟」と
「山椒太夫」と「和解」くらゐのものだ.
しかも何べん読んでも泣いてしまふから可笑しなものだ。
~~帰つて~~夕食後から、仕事にかゝる。一気に四十九枚まで. ―― 最後の
文句も書いてしまつた. これで初稿出来だ. ともかくほっとする.
すこし、シャレタ、スタイルになつたやうだが、余り糞真面目なのもどうか.
こういふ題材は余り真っ向から書くとお涙頂だい式になり易く、イヤだ。
感傷はたまらない。
白鳥の「作家論」読む.
午前一時　就寝。
りよ子と史人のことを考へる。文学といふものはありがたいものだ。
死んだ人間をつかんではなさないのだから。

六月二十五日（火）　晴　　ひらくといふので忙しさうにしてゐた．

粕谷氏訪問、竜ヶ崎行の切符渡しに．粕谷氏はアイスキヤンデイーの店を

バターピーナツ、キヤンディー、サイダー、きんつば、びわ　おまけに夕食

まで御馳走になつて帰る．たばことキャンディーのおみやげ。七時半頃辞去

帰りの省線、上野駅からのりこんで来たパンパンらしき女二人、そばの若い

男が何か好奇的な眼で見たのであらう．すさまじい見幕で次のやうなセリフ

を吐いた　　えか」

「何を笑つてヤかんでェ、チンピラ野郎奴．てめぇなんかまだ半人前ぢやね

そして前の~~人間~~客が次の駅で下りようとして起ち上つた瞬間、別な女と

その席をとるに口汚く罵り合ひながら、争ふ。

夜の八時頃電車にのつてゐる若い女はすべて、何となく会体の知れない

感じがする．

濃い化粧、安っぽい衣裳、ハンドバツクも何も持たず新聞を一枚

もつてゐる．

マニキュアをした爪でさかんに鼻くそをほじくる。

こんな風景を観ながらふと、トーマの「レイモンド」の一節頭に浮び

何とも云へぬ感傷的な気分になる．

鶴見駅から家までの夜道　同行三人、さかんに被害の話をする．

歯が痛んでかなはない．

小林邦二兄の父上より手紙にて、彼はチブスにて入院中との事．

早速見舞の手紙出す．

六月二十八日（金）　晴

会社へ辞表提出と六月分給料の受取りを兼ねて行く．課長不在にて

辞表は出せず　給料だけもらふ．石井氏にコーヒーをおごられる．

歯、終日痛む．~~はやく~~ヴェロナールをのみはやく寝る

六月二十九日（土）　晴

歯の治療　今日も終日痛み何をする気力もなし．

病院ではゲリゾンの注射（これで三本目）、家ではスルフォン剤の粉葉

「アンナカレーニナ」第三巻まで読む

六月三十日（日）　晴．　夜に入つて小雨

「帰来数日」今日で二十七枚まで書く．あともうすこした．

「アンナカレーニナ」を読みつゞける。

かういふ力の前ではしみじみ自分の無力を感ずる．

が、仕方がない．たゞこの一途につながつて行くより外に仕方がない．

そこに小説が在るといふ書き方でなく、そこに人生があるといふ

書き方、すこし変らなければダメだ。

直接の感動が問題だ。

醜いものは田舎者のお酒落である。

×　　×

この「自由」を保留する方法。

トマスマンの短篇集Ｉを読み直す．

「トニオ．クレーゲル」の問題．芸術家の実生活への憧れ．

両方ともウマクやらうなどと思ふのは大それた了簡であらう．

フローベルのサンドへの手紙、にもこの同じ悩みを訴へてゐた筈だ。

七月一日（月）　㊀　雨．

会社へ行く．課長に会ひ　正式に辞表を提出する．

香月部長、庶務課長、安陪さん、及び弘報課の人々に挨拶を

して帰る．

「帰来数日」仕上る．三十二枚、ともかくこれが帰還第一作だ．

不幸な題材だが仕方がない．自分の不幸を食つて生きてゐるのが

作家といふものだらう　プロメラの就労だ。

自身で何等かの問題を創造的に設定できないやうなものに、

せめて、それを肉体的に経験すること以外に方法はない

彼が多少でも人生に交渉をもつとすればこの経験を通して

だけだ．

だから、何でもにぶつかつてみることだ．それからどういふ手ごたへを
感ずるか　それが問題だ．
と言ひながら、自分はこの頃ひどく臆病だ．
この臆病さを主題にして何か書けると思ふ
題は「殻の中」といふのだ．
生き生きとした興味をもつてものを見よ．
半分眠つた眼には何もうつらぬ。
~~浅見さん~~高橋英さんに、浅見さんの定期券について依頼の手紙．
室蘭の三男へ帰還の通知出す．

逆説一つ．
　　自由といふことの不自由さ。

七月二日（火）　霧雨
「アンナ・カレーニナ」読了．
これも恐らく四回目位だが、読むにしたがつて、広さと深みの出て来る
作品だ．そして長編小説としてほとんど完全な一典型だ。
人物描写の見事さ、草外面的に表はれる些細な行動の巧みなとらへ方
（性格を一挙に浮び上らせる）
転廻し反発し内コウするさまざまの心理の動的なとらへ方．　この動的な
といふところが特に大切だ）
バルザックほど煩労でない自然描写．　背景としていてこの登場して
来る人物のその場合の心的状態に巧みに相応させてある．だから疲れず
に読む事が出来る．）
構想と構図――　その切りとり方、その章のはじめと終りとの思い切った逆転．
作品の中に於ける人物の発展の成長．　これが日本の小説には欠け
てゐる．）
ともかく、数十度読む可き作品だ。
歯の治療――　その歯に金冠をかぶせてもらふ．

~~七月三日~~　岸田さんの「 泉 」寝床の中で読了．　　予
岸田さんの~~もの~~小説を読むのはこれがはじめてだ．そして想以上に
面白く一息に読んだ．
斉木素子といふ女主人公だけ生きてゐる．次に伯爵．
他は単に一種の媒介者としてだけの役しかもつてゐない様だ．
会話は流石にうまい．殊に女同士の会話．
逸見先生からハガキ
七月三日（水）　小雨
梅雨型の天候に入ったやうだ．この雨は農家に必要なものであり、
そして、いまの日本人全部に貴重なものだ。
食ふことの心配、食ふといふことだけのための心配、自分の動物的存在
のためだけの心配―人間がこの心配からだけでも免れることが出来たならば
悲劇の３／４は解消するだらう．
歯の治療
トマスマン短篇集Ⅱ読み直す．
「道化物者」と「トリスタン」、殊に「トリスタン」は何べん読んでも
好きだ。抽象語をもつて具体感を出すその特殊な表現法。
緊縮と抑圧と整斉されたスタイル――文章の金属感（彫刻
的○といふよりは）
岸田さんの「落葉日記」読了．
これも梨枝（リエット）といふ混血児の少女だけ生きて他はそれを生か
すための媒体にしかなつてゐない．
（トルストイの小説のやうに作中人物の一人一人がそれ自身独立した存在
として生きてない）
兄が「朝日評論」と「人間」を借りて来てくれた．
寝床の中で朝日評論を読む．

七月四日（木）　晴．

嫂と二人、日比谷公会堂の日響公演を聴きに行く．

１．ボローディン　第二交響楽　　たいして感心しなかつた

２．ベェトーベェン　ヴァイオリン協奏曲．　独奏　巖本真理）

これも期待以下の出来だった．巖本の弦はまだヴォリユームが足りないやうに思ふ．カデンツアは余り地味すぎた．

３．ヴァーグナー「リエンチ」序曲．

こん度のではこれがいちばん楽しめた．

帰途銀座に出、モナミにて茶をのみ、新橋の青空市場を素見して帰る．

今日はアメリカの独立記念日でいろゝ催しものがあつた筈だが街上

アメリカ兵の酔漢を一人も見ず．

七月六日（土）　晴．

歯の治療　帰途その足で、若松町の逸見先生訪問．

「帰来数日」原稿手交す．　先生は下痢にて臥床中なりしも

わざわざ起きられる．井上友一郎氏来訪．

四時頃辞去．飯田橋まで井上氏と共に歩く．この界隈一目焼土なり．

飯田橋より早稲田行電車にて、蛭田君の家訪ねたるも、同君宅

すでに焼失し居れり．

大学構内を通りグランド上よりバスにて新宿へ出、青空市場にて

ジャが芋、キャベツ、にんじん等のシチユー（と称するもの）をたべ（一升五隻）鶴見へ帰る．

×　　×

寝床の中にて、正宗白鳥「作家論」再読了．名著なり．

七月七日（日）　晴．

トマス・マン「ヴェニスに死す」三読．

マン得意のテーマなり．美神への徹底的な奉仕による自己滅亡の道程．

トルストイと比較せよ．

谷崎潤一郎「陰翳礼讃」三読
正宗白鳥「作家論」 二）三読
夕飯後兄、嫂と三人　大森まで散歩．夜店古本屋等を素見
氷水をのんで帰る．大森の一古本屋、中央公論社版の「トルストイ全集」
８００円なり．
今宵七夕なり．
~~七月~~
七月八日（月）　晴
「母子鎮魂」起稿
終日机座．
七月九日（火）　晴
歯の治療．
「母子鎮魂」つゞける．
吉岡、神戸、山本より来信．~~山本~~
七月十日（水）　晴．酷暑（三一・三度）
歯の治療．
早文九月号編集会議出席．
谷崎、逸見、江間、森田素、鈴木悌、北條、宮川氏等出席．
帰途、日本橋女学校に宮川と共に立ち寄り宮川手製の焼飯を
ごち走になる．　宮川はこゝに自炊生活を営んでゐる）
宮川の「女を負ふて」四十枚読む．勝手な批評をする．
十一時頃帰る．
兄嫂まだ起きてゐる．うどんを食ふ．
宮川の田舎、―― 茨城県下妻．　取手からのりかへて、水海道のつぎの駅）
手帖をどこかへ落して来た．
七月十一日（木）　晴．酷暑（三一・五）
朝からむしむしと蒸し暑く後頭部の芯が圧されるやうにいたい日だ．
兄もあねもさういふ．
高い温度のために兄が昨夜食卓の上に置いた腕時計の革が

びつしより汗をかいてゐる．　支那の暑さはどんなに暑くてもかうまで疲れなかった．　カランとしてゐた．）
朝飯を食ふと、またすぐ寝る．裸で畳の上にゴロ寝だ．そのまゝヒルまで寝てしまふ．
昼飯の後また横になる．谷崎潤一郎「青春物語」を一冊、再読．
昨日、手帖を落して来たので、知人のアドレスを整理する．
取手の母へ、お盆の日来るやうにハガキ出す．
新美氏より突然ハガキ来る．
すぐ手紙出す．
夜食後仕事にとりかゝる．五枚．　今日で三十枚まですゝむ）

七月十四日（日）　晴．酷暑（三三・六度）
朝からうだるやうな暑さだ．
昼食後横浜へ遊びに出る．伊勢佐木町、山下公園埠頭、南京街など
みて帰る．横浜は日本人より進駐軍の方が多い位だ．
山下公園は全園ほとんど賭博場の感があつた．
（多くは失業した復員軍人である．中には中学生み○やうなのが混ってゐる）
夜、仙仕事つゞける．

七月十五日（月）　晴．
会社へ退職金のことで出頭、しかし、書類が経理へ廻ってゐないとかて、
人事の女の子にあとを頼んで帰る．
また桜木町へ出る．スラム視察のためなり．
桜木町駅頭にて制限時間の解除を待ってゐると、偶然兄に会ひ、
兄の定期を共同で使つてまんまと成功する．
夜仕事．
兄の知人の福田氏夫人　小説を一つ書いたから見てくれと言つて使ひの者にもたしてよこす．向日葵記三十二枚なり．
嫂の言いよれば、この内容はほとんど事実そのまゝの如し．

読後の感想七枚ほど書く．―― まだ稚拙を免れず．
（このやうなひとの書いたもの、無下に扱ふも、さりとて真面目に扱ふも共に困難なり．）
~~山本~~山本悟さん　また麦粉と甘薯粉送つてくれる

七月十六日（火）　晴．
嫂と二人横浜駅に、畑中氏一家の九州行を見送るべく出かける．
が、今日の汽車ではなかつた．
クロポトキンの「ロシヤ文学講話」上下二巻再読す．
（クロポトキンは、ツルゲェニエフに厚くドストエフスキイにうすいやうだ．
プーシユキン―レエルモントフ―ゴーゴリ―ツルゲーネフ　ゴンチヤロフ
トルストイ　ドストエフスキー
―― ゴーリキ ―― チエホフ

たつたこの九人がロシヤ文学を世界文学としてゐるのだ。
若林君からハガキ。

七月十七日（水）　晴．
今日で歯の治療全部完了した。
「母子鎮魂」五十二枚　第一稿出来上がった．

七月十八日（木）　晴
兄と嫂と三人で横浜駅に、畑中さん一家を見送る．
トルストイ「クロイツエル・ソナタ」~~再~~三読．
第二回目に読んだ時よりも感銘は薄かつた．これは、あの時はこの作品の主題が自分の生活に近いものであつたからであらう．
その問題の失くなつた今、かなり遠い気持で読過した．
若林君へハガキ、山本と長見へ手紙書く．
永峯君からハガキ．　二十二日公休につき遊びに来いといふ招待状）
トルストイ「芸術とはどういふものか」読む

夜、桜木町行き．
兄と嫂は福田氏宅へ、例の原稿と感想をもつて行ってくれた．

七月十九日（金）　晴
永峯、多田両君へ速達のハガキ．
浜野へ手紙、松村泰氏へハガキ．
~~永井~~今日より漱石全集を読み直すことにする。
先づ「道草」からはじめる．
小宮豊隆の「夏目漱石」を平行して読む。
夜、 母子鎮魂」の第二稿にかゝる、八枚．
午前二時就寝。

七月二十二日（月）
多田と二人、永峰徳さん宅訪問．彼の招待によるなり．
省線平井駅下車、すこし歩いて都電今井下車．三丁ほど歩いたところ、
この辺江戸川をはさんですぐ向ひ側は千葉県（行徳、浦安）なり．
完全に田舎なり．
ビール、ゑび、きすのてんぷら、野菜さらだ、あさりの佃煮、きうりもみ、
白い米の飯、たまごとごぼうの味噌汁、ジャムとバタをつけたコペ ― など
沢山の御馳走。　彼は養子なるも、養父母の彼に対する愛情のこまやかさ、
実の我が子にまさるべし．　夫人と一女、彼は完全に幸福者なり．
八時半暇を告げて帰る．帰途小松川の大橋を渡りたるところにて
後方よりジープにのりたるアメリカ兵に「ダイジョブ」と声をかけて停車す．
何のことか判らず佇立し居れるに、 のれ」といふ．
ひよつとしてこれは暗いところにつれて行かれＨｏｌｄ ｕｐ！などと云はれやせぬかと
内心びくびくものなりしも斯ゝる機会ででもなければジープに乗ることなど
又と得られぬ経験なれば、多田を促して乗る．
快速なり煙草を出して一本づつくれしかもライターにて火までつけてくれる．
これはギャングにあらず、よきアメリカ人なり．

勤務し
ラジオトウキヨウに~~つとめ~~てゐるといふ．有楽町駅まで送つてくれる． 彼はギンザへ行くなり）感謝の印にもつてゐた扇子一本進呈．握手して別れる．
車より狐につままれたる心地なり．多田と顔を見合せ大いに笑ふ．
若き女性にあらざるわれら野郎ども二名を彼はいかなる心境にて乗車せしものなるや．
人生は愉快なることもあり．かゝる「息抜き」あれば人生は助かつて行くものなるべし．

七月二十三日（火） 晴．
「母子鎮魂」第二稿 二十枚まで。
小宮豊信「夏目漱石」三読了．
漱石伝として最高のものなり．評者の漱石に対する愛敬深切なればなり．
すべて批評は愛なり．重き批評は愛なるべし．
九州の後藤多美子へ先日本所の母より頼まれた、手紙書く．
小林邦二、新美彪氏へ手紙．
永徳さんへ昨日の礼状（ハガキ）出す．
漱石、 道草」読了
同「虞美人草」読了
夜、兄を迎へ○と 駅まで散歩．
七月二十日（土） 晴 （つけ落ち）
銀座三越に行き日響の予約会員の定期券を買ふ．
三ヶ月にて三十円なり．嫂と二人分買ふ。れの三三・三四、なり．
邦楽座にて「幽霊ニューヨークを歩く」を観る．
ソフィスケートな軽喜劇なり．面白し．
アメリカ紙の評に曰く、 こは日人間世界の第二次元を扱ひたるものなり」
帰家たれば本所の母あり．十一時頃来りしなりと。
母の手作れる馬鈴薯二貫目もつてきてくれた。

四時頃帰る。

七月二十四日（水）　晴．酷暑．三五度．

兄と嫂は邦楽座は「幽霊紐育を歩く」を観に行った。

「母子鎮魂」をつゞける．三十一枚まで．

漱石「講演、談話」篇を読む．

夜、 三四郎」読了．

七月二十五日（木）、曇．

今日は珍しく涼しい．風もかなりある．

仕事つゞける．四十枚まで．

浜野来訪．久しぶりで文学の話をする．

文学青年は彼と自分二人のみか。他は皆落ち着いてしまつた．

だれも文学の話などせぬ。

青臭いといふのだらう．　駅まで

彼を送って行く途中、思ひかけなく秀子に会ふ．身体の調子例に

よってハッキリせぬ為診断を受けに出て来たのだといふ．

なるほど顔色もわるいし、頬が落ちた。

鋼管病院での診察の結果、やはり妊娠であつた．四ヵ月だといふ．

やはりあれは駄目だつたのだ（塩酸キニーネ）

七月二十六日（金）

夜仕事つゞける．五十枚まで．

夜九時頃、福田氏、夫人、井上氏来訪．

夫人は素肌に濃い臙脂の麻の単衣を着てゐる．帯は黒い、

そして非常に胸高はしめてゐる．髪に大きな貝の櫛櫛、指には大きなルビー

の指輪、―　強烈な感じのひとだ．　我」も恐らく強からう。

福田氏と商売の話をする．やり手だ。たいへん若い。大阪弁。

夫人第二作を示さる。

世界、文春など拾い読みし寝る。

七月二十七日（土）　晴．

「母子鎮魂」第二稿五十六枚脱稿、第一稿より五枚ながくなつた。

これは一度横光先生にみて頂くことにするつもりだ。

福田夫人来訪、ヴィタミンの注射に。

昼食後、浜野家訪問．例によつてまたごちさうになる．

彼のところの南瓜は実によく出来た頗る美味であった．赤飯なぞわざゝ

炊いてくれる．全く済まぬ．

実生活の勝利と芸術の敗北．二者択一か、又してもトマスマンの問題

（トニオ・クレーゲル、ヴェニスに死す．トリスタン）

浜野の話 ― 眼鏡をかけた骸骨．　フィリッピンの山の中の出来事）

絶対面に於ける人間のエゴイズム。― ドストエフスキーの主題。

十時半ころ暇して帰る　家へ着いたのがもう十二時であつた。

七月二十八日（日）　晴．

昼食後横光先生をお訪ねする．先日参上した時お借りした新潮と

文学界とそれから「母子鎮魂」を風呂敷に包んで行く．

松村泰次郎玄関で、奥さまから、先生は脳溢血のためこの一ヵ月間ずつと

面会謝絶で臥床して居られた由、そして昨日あたりから大分快くなられた由

きく。先生の脳貧血なら想像されぬこともないか、脳溢血といふのには

以外の感がする．

松村泰次郎さんが丁度よく来てゐた．

今日もまた色々お話する．机の上にキレイな新しい聖書が一冊のつてゐる．

近所の闇市で買つて来られた由、米国で印刷した邦語訳だ

└ 一冊五円

「これを家のものに一冊づつ買つてやつて、読んでもよまなくても持たせて

置くつもりだ」

と云われる．先生は案外元気にして居られる．

先生の話 ――

小説は文章だ．語り口だ。　　作者がまづ面白いと思はなければダメだ。
昔は人間と人間との「関係」がいちばん興味があつたが今は、人間の「運命」といつたやうなものに興味を感じてゐる．
ヴァレリイは「伯爵夫人に面白いと思はれるやうな小説を書かなきやダメだ」と言つたさうだ．
作者が、~~これを~~或る題材に興味を感じてこれを書かうと思つた時、すでに半分以上、作者の運命は決定されてゐるのだから、作者はその「運命」を信仰して、あとの半分の運命を決定すべきだだ．
つまり作者が人生の一事実をこれは面白いと感じた時、すでに作者のその時の全部がそこに決定されてゐる．即ち、はじめに作者のモラルがあつて、モラルが　　人生の一角を切りとつて来るのではなく、
面白いと感じて切りとつて来た人生のその一角　　その
に、作者のモラルがあるといふこと、切りとるといふことがモラルなのだ．
先づ燃えるといふことが必要だ―燃えるための手段は何でもいゝ、たとへば「うんと金をもうけよう」と思って書くのでもいゝ、要は燃えることだ。

×　　×　　×

母子鎮魂よんで頂くことお願いする．
~~帰り~~例によつて先生の読んで面白いと思はれるもの――今日は、展望七月号の荷風「間はずかたり」と、亀井勝一郎の「人間教育」――お借りしする。
荷風のものは、小説の「時間」といふものを巧みに扱ってゐる点、
亀井氏のものは「きみみたいな~~もの~~男なら面白からう」といふわけで、
四時半頃、村泰次郎氏と共に辞去す．
渋谷駅の附近で、二人でミツ豆と水密桃を食つて別れる．
電車の中で「間はず語り」読む．荷風のものとしては上々ならず．
「雨瀟々」の如き品格なし．
色情を感ずる．しかも、あまり品のよくない色情を．
「それから」読了。
激情を描く場合、たゞ分析と批評ばかりではダメだ．
ドストエフスキー的筆法でいかなければ、激情が実感として来ない．

七月二十九日（月）

朝からめづらしく薄曇りでむしろ肌寒いくらゐだ．午後から到頭

細雨になつた．終夜はれず．

十一時頃福田夫人来訪、二階へ上つてもらひいろゝ話す．

文学をやる人間またはやらうとする人間に通有な告白癖を、やはりこのひと

ももつてゐる．面白さうな過去をもつてゐさうなひとのやうであゐ．

近頃たいへん景気のよいといふ話．蓄音器を一つ買つてくれなどと注文する

一時頃まで話して帰る．

梶井さんの「檸檬」またひつぱり出して読了．

何べんよんでもこれはいゝ、自分に近いものを感ずる．親しみ深い君だ。

夜、歳時記と白秋詩抄など茶の間でひろい読みする．

二階へ上つて、 門」読了．

お米が自然に生きてゐる．影のやうにひつそりと生きてゐる女がそれらしく

描かれてゐる．お米の微笑はほとんど象徴になつてゐる．

次作のこと．すこし考へて寝る．

松村氏よりハガキあり。

七月三十日（火）

小林邦さんより来信．病気全快の由、早速祝状出す．

母と烈、三崎より来る．

兄より、ライターを買つて貰ふ．大助かりなり．

七月三十一日（水）

北海道の長見より手紙、やはり彼は手紙よこした．

すぐ返書．

高見順「いかなる星の下に」

里見弴「銀語録」

武者さん「日本の傑れた人々」

夜、庵原の吉田さんの話きく．これは書けさうに思ふ。

今日で七月も終りなり．

八月一日　曇 後 雨．

創元社に松村氏を訪ねる．小林さんの「無常について」を買ふために。

〇〇　住田氏などと共に「プロメテ」をやつてゐた平田氏に紹介さる．

同氏はこゝの科学関係の仕事を専らやつて居られる．

ワセダの史学科の先生をしてゐるのだか傍ら、

「無常について」と頴原退蔵氏の「芭蕉名句集」(これもかねて欲しいと思つてゐた）の二冊を結局たゞで貰つて帰る．

Ｂ２９の編隊、低く家根の上を通る ― 想像より、案外に小さかつた。

浅草に出る．蛭田氏の山春興行部をたづねる．金龍館 ― 露店事ム所 ― 千代田館などあちこちきき廻った揚句それは結局、松竹座の三階にあつた．

蛭田君とその兄上のことをたづねてみたが「そんなひと知らぬ」といふ意外な返事だ．とりつくしまもない．蛭田君がウソを言つたとは考へられぬ。

ともかく仕方ないのでそのまゝ帰る．ついでに松竹座の演しものをみて行く．

森川信一座に三浦光子が加はつてゐる．

浅草風なコメディーだ．たいしたこともない．

たゞ、いかにも浅草の小屋らしいこの雰囲気の好ましさ．

都会の孤独感、 ― 既に自明の感情だがやはり敗かされる．

浅草から一気に桜木町まで出る．

驟雨来り止まざるためすぐまた鶴見へ戻る．

八月二日

終日雨降る．

仕事の構想すこし考へ、他は終日、烈を相手に遊びて過す．

八月三日　晴．

第三作にかゝる．復員といふ題に暫定的に決めて、書き出す．

半ペラで十二枚まで．

例によつて書き出しが苦労だ。

山本、新美両氏より来信．

夜、㊀散歩がてら安藤までコーヒーをのみに行く．
そのまゝ桜木町へ、― 駅頭はパンパンガールの縄張りの如き観を呈してゐる．
或る町の情緒、こゝでは人間感情が赤裸になるといふが、しかしそれは
ウソだ．こゝにもやはり感情の装飾がある．人間とは「着物を着た動物」
十時半頃帰る．　　のことだ。
「人間」七月号を読んで寝る。

八月四日（日）　晴．
だいぶ涼しい．
朝からずつと仕事にかゝる．
夜、兄といつしよに駅まで散歩．兄は用事で桜木町へ．
自分は兄に教へられた古本屋へ寄つてみる．想像以上に大きな
本屋だ　鶴見にもこんな本屋があつたのかと驚く．
しかし、小説はあまりいゝものなし．
チボーデの「ベルグソン哲学」が出てゐた．これが欲しかつた．四十円、
残念だが買へない．
それから
国史地図と日本・世界地図とが欲しかつたがこれも買へない．
金はやはり必要なものだ。
安藤は今日は休み．向ひの森永でコーヒー（まづい）のんで帰る．

八月五日（月）
今日も涼しい．母と烈、三崎に帰る．
平野氏が訪ねて来てくれた．大森にゐる由、そして横浜の
ＲｅｄＣｒｏｓｓにつとめてゐる由、甘い紅茶を水筒につめ、本ものの甘い
ビスケットをお土産に㊀もつて来てくれた．
しかし近い中こゝをやめて商売をやる由．
送つて駅まで行く．
夜夕飯まで仕事、夜またすこしつゞける．四十八枚まで．
塩浜と高橋英氏に手紙とハガキ書く．

トルストイ「芸術とはどういふものか」を読む．
この強烈な独断、― 独断もこゝまで徹底すれば痛快だ．
ボードレエル、ウェルレーヌ、メーテルリンク、ゾラ、ユイスマン、モウパツサンなど一列に槍玉にあげられてゐる．ヴァグナーもベートヴェンもラファエルも、めちやくちやだ．徹底的な偶像破壊だ．
美意識といふものの解釈に独断があるのだ．
人生のための芸術、宗教意識、 ― 世界人類の結合のための
芸術、― はつきりと「目的」を持つてゐる．
奉仕するわけだ。
ロシヤ人の芸術観だ．フランス人とは違う、またドイツ人とも違う、
日本人とは全く違う、日本人の芸術は芸の術だ。
そして、人格完成への「道」だ．自己救済であつて、 他」を意識しない．
それは芸術者自身のためにあつて、他のためにない。自己目的だ。
芭蕉がその典型だ。

× × ×

気持が不安定だ．四ッ辻に立つた男の心境、自由の保留 ―― 最大限の
それは結局自由といふものに自分を限定するわけだから不自由といふことになる ― ヴァレリイのテスト氏を見よ．

× × ×

自分の現在を煮つめよ。

八月七日　晴．
今日は朝からまた少し暑い．
新美氏からの手紙をもつて、内幸町に満映の東京支社を訪ねる．
だが、支社のあつたその建物は冨国生命の仮事ム所になつてゐた．
そして満映がどこに移つたかはだれも知らなかつた。
日比谷公園で進駐軍の兵隊のやってゐる野球をすこし見物してから
ビューロー本社の人事課に小泉さんをたづね、かねて手続方を依頼
してあつた退職金をもらう．みなで九百円ほどあつた．

帰りがけひよつくり太田女史に出会つた．女子はやせてちんまりしてゐた．
すぐ二人で丸ノ内へでかけキヤッスルでコーヒーのんだ．　ついでに
女史のパンもごち走になつた．
女史の家も焼けた由、そして八十軒の家作も全部焼失した由．
それからお父さんもなくなられさうた．
しかし女史はさつぱりしてゐた．着てゐる白いブラウスは高橋のお京夫人
からもらつたといつてゐた．スカートはふとんの裏をはいでつくつたといふ．
女史は全く色気がない．こつちも安心してものが言へるので気ラクだ．
女史は女史で「やつぱり男のひとはあつさりしてゐていゝ」と言ふ男を
アツサリさしてゐるのは女史自身なのだが、女史はそれに気づかない．
別れて、有楽町まで歩き邦楽座に入つて「肉体と幻想」をみる．
実に下らない．デュヴイヴイエのものだから、もうすこしと期待してみたの
だが、つまらぬものだ．
それより、タバコがひどくのみたいのだが一本もなくて、気がヘンになりか
けた．ないとなるといよいよのみたい．よほどのんでる人のところへ行つて
「一本下さい」と言へうかと思つた．
有楽町駅前の喫茶店で茶をのみ、新橋まで歩く．途中兄に
おしへられた「たくみ」といふ民芸小屋と、三壺堂といふ本屋をのぞく．
どちらもつまらなかつた．たゞ「たくみ」には、河合寛次郎氏の
壺が一つ出てゐた．これは芥川賞の副賞にもらったあの硯と同じ
色をしてゐるので、ヘンになつかしく眺められた．
琉球の茶碗もすこし出てゐたが、たいしたものでない．
店の品物に埃りがいつぱいかゝつてゐるのが、第一、不快だつた．
新橋駅前まで来て、やつと、タカラクジを買へば「きんし」三本
もらへることに気づく．早速かふ．そして、一本を心ゆくまで喫ふ．
鶴見まで来て、また安藤に入り、こゝでまた、あとの二本をゆっくりと喫ふ．
家についたら、今日はタバコの配給日でのぞみが机の上にあつた。
テーブル

嫂、西荻から帰る．久代さん、家にもどつて来てゐた由、これであちらも
一安心だ．

八月八日　晴

今日は朝から眠い．兄も朝飯を食つたあと会社へ出かける服装のまゝ
茶の間で心もちよささうに眠つてゐる．やはり眠いのだ．
二階へ上つてまたすぐ寝る．
眠つてゐる最中、福田夫人が来て、第三作を置いて行つた由。
「緋鹿の子」といふ十枚もの．
読んでみたが、作者の興味がすこし浅いところにあるやうに思ふ．
しかし、文章はいままでの二作よりはたしかに㊀よくなつたと思ふ．
やはり、書けば書くだけのことはあるのだ．
ラジオで都市対抗野球をきく．
「明暗」を読む．
「行人」は昨日読了した．
直といふ兄の嫁になる女が不思議なレアリティーをもつてゐる．
これは何度よんでも読む度にさう思ふ．
新美氏へ昨日の結果を手紙で報らせる．

八月九日　晴

仕事、すこし．― 作品の枚数（ながさ）を最初に決めてかゝるのは、作品そのもの
の形式を規定することなのだが、（書くべきことゝ、書かぬこととの取捨選択）
こん度の作は、すこし、枚数がのびさうだ．筆がついそこまで拡がつて来た．
制限せずにひろげてみることにする．
夜、庵原家へ兄と二人で蓄音機とレコードをとりに行く．
レコードはリユツクに背負ひ、蓄音機は二人で手にさげて、― 帰りは
ひどく難儀した．
家についたのはもう十二時を過ぎてゐた．
母が来てゐた．

八月十日（土）　晴

帝劇へ新生新派の切符を買ひに出かける．「新累ヶ淵」といふのだ母が怪談ものを好む故ひとつサービスしようといふわけである．四枚買ふ．三一人二十円といふのは今時の物価としてはやすい方だらう．

茶を喫んですぐ帰る．

すこし仕事する．

夜、レコードをかける．ササウンドボックスがいたんでゐるらしく音がひどく割れて聴くに堪へない．

高橋敏君からハカキ

八月十一日（日）　晴．

朝から机の前に坐る．ずつと書きつゞけ夕方までに遂にかき上げる．半ペラで一一八枚、清書すればもつと永長くだらう．

ともかくホッとする．

創作といふものは不思議なものだ．

書くことは単によろこびばかりではない．よろこびの裡に、大いなる苦痛がある．そして、苦痛の裡に大いなるよろこびがある．

全く、自分自身の内側に於てのみ生成されるこの作業は、

自分のやうな性質の人間にとつては、全く、うつてつけのものだ．

このやうな仕事を選んだ自分を祝福する．

思想とその表現 ― いづれにしても「限界」のない難物だ．

少しづつでもそれを深め、それを拡げて行くこと．

×　×　×

夕方、近所のラジオ修理と書いてある家へ、例のサウンドボックスをもつて行つて修理（蓄音キ）をたのむ．

ハンダづけがとれてゐるのが原因だつたらしくそれをつけ直したら完全によくなつた．

皆で、手当り次第にレコードかける．

久しぶりできくレコード音楽で、大いに楽しかつた。

高橋敏君に手紙

八月十三日（火）

三好十郎「浮標」 三日間」の両戯曲集読了.

高神覚昇「般若心経講義」読む

花柳章太郎随筆集「きもの」読む.

夜、多田来訪. しじみのお土産.

「満州歳時記」速読、これは良著だ.

八月十四日（水）

母、兄 嫂、と四人帝劇へ新生新派「累ヶ淵」を観に行く.

脚本はつまらぬが、花柳の女師匠が綺麗だ. 新派はこれが始めてだが、

想像してたほどヘンな誇張がないので助かる.

母がひどく面白さうに観てゐた.

女形といふのは案外不自然でもない.

すぐ背後にアメリカの兵隊が一人来てゐた. 若い日本の女の子が一生懸命

説明してゐる. ― ともかく最後まで〓ニコニコしながら観てゐた.

銀ブラして新橋まで歩き、帰る.

〇小堀杏奴随筆集「回想」読む.

尾崎喜八詩集「この糧」読了.

八月十五日（木） 晴

「復員」第二稿にとりかゝる. 十枚まで.

第一稿には余分なものが多いやうだ. 時々、 脱線」してゐる.

焦点から外れぬやうにすること.

茶山准尉殿から手紙.

すぐ返事かく.

夜、寺田寅彦全集第十六巻拓ひ読む.

辰野隆「ふらんす人」 随筆集）よむ.

こういふ書物をよむことは実に楽しい.

阿部知二「冬の宿」読む.

八月十六日（金）　晴

母と猛来る．

「復員」二十三枚まで．

八月十七日（土）　晴．

仕事つゞける．　三十枚まで。

石坂洋次郎「麥死なず」読む．

兄の本整理す．

寺田寅彦全集拾ひ読みす．― 「雲の話」といふ講演面白し．

夜、兄の会社の若いひとたち五人（女三人、男二人）あそびに来る．

いつしよに交つてレコードをきいたり話の仲間に入ったりする．

社交といふこと．

いろゝな人間の空気にふれるといふことに必要だ．

八月十八日（日）　晴．

台風警報出る．

仕事、四十一枚目まで．

母、たけし、三崎へ帰る．

星野立子「玉藻俳話」読む．

児玉富隆君よりハガキ来る．

八月十九日（月）　晴．すこし風

台風は九州南端を通過しただけで東支那海の方へ外れるらしい．

朝食後すぐ仕事にかゝる．夕飯までかゝつてついに書き終る

六十枚ちようど（復員）― 出来栄については例によつて不満だ．

たゞともかく一片付き片付いたといふ感じだけ．いつになつたら快心の

作が書けるのか．やり切れない気持だ。

昼食後、嫂のたのみの牛肉を買出し旁々風呂に行く．

安藤でコーヒー一杯のんで帰る．

自由であらうとすれは孤独でゐる外はない．
ところが孤独とは不自由なものだ。
この三段論法で行くとどうなるか。

限定されゝば限定から逃げ出さうとし、不限定を得ればまた
限定されようとする．

最も完璧にそれを所有しようとすれは、それを常に憧れの状態
に置くことだ。

風呂へ行く途中、若い母に連れられた小さな子．やつと歩きはじめる
やうになつたのか、まるでおどりでもおどつてゐるやうな工合に地面から
とび上りとび上り歩いてゐる。史人を思ひ出す．生きてゐれば、
こんな工合に歩くころだ。

何故、 思い出」や「回想」や「追憶」は楽しいのか．
何故「過去」はすべて美しく感ずるのか．
「時間」といふものこの不思議な濾過作用。

児玉君にハガキ書く．

八月二十日（晴）　晴．
深田さんを訪ねるため鎌倉に行く．二階堂五五九番地．
鎌倉はこれで二度目だが第一回は海水浴のためたゞ駅前を素通りした
だけで安ほとんど不案内と言つてよい．　バスで
会ふ人毎に道をきいて行く．
鶴ヶ岡八幡宮をまで参拝する．　日光廟のあのケバケバしさよりも
鎌倉源氏の鎌倉の質実さの方に好感がもてる．
本殿への上り口の石段のところにある大銀杏は樹齢一千年以上といふ．

高さ十五間、回り二十四尺余としてある．注縄(しめなわ)が張られ矢が二本はさんである．公孫樹の枝々には、何の願事が沢山の結び文が結んである．
池の蓮を前にして昼食をする．
鎌倉博物館参観、雪舟の山水画が一幅（これはいつかアトリエか何かでみた記憶がある．)いつまで立つてみてゐてもすこしもあきない．
もつてゐる力に惹きつけられる．体の中から何か「勇気」といつたやうなものが湧いて来る．恐ろしいものだ．
その他、鎌倉時代の仏像などすこしあつたか、そしてその大部分は国宝となつてゐるが大してひきつけられたものはない．
実博物館のすぐ前に実朝歌碑が建つてゐる．
　例の「~~山海~~山はあ(ママ)せ海はさ(マ)けな(マ)ん世なりし(マ)も(マ)　君に二心わ(ママ)れ
　あらめやも」の歌が石に彫つてある．（注）　　その~~本~~
鎌倉、室町時代は日本歴史の中で好きな時代だ。
深田さんの宅は八幡宮から歩いて二十分位のところ．
だが、生憎、郷里に行つて居られて御不在であつた．㊀奥さんにお目にかゝつて辞す．奥さんは北畠八穂といふ筆名で最近小説を書かれてゐるひとゝきいた．
お体は、余りお丈夫さうではない．
~~長~~来た序に長谷の大仏をみようと思つて、切符を買つたが電車が故障でなかなか出ないので　時間つぶしに鎌倉文庫や他の本屋二三軒を素見の後、建長寺へでも行つてみようと思つて、そこへ出かける途中、偶然、細田常ムさんのお家を発見し、思い切つて訪ねてみる．
常ムも奥さんもちつともお変りがなかつた．
庭からの眺めは素晴らしい．
八十三専ム、浜田さん共に亡くられたことき(な)ゝおどろく．
二時間ほどお邪魔して辞す．　―　㊀㊀㊀㊀㊀
㊀㊀㊀㊀㊀㊀㊀、長谷へ電車で行き大仏を見る．
想像より小さかつた．十銭出して胎内見物 ― 何のことはない
ガランとした中空だ．それだけだ．
（注）　山はさけ海はあせなむ 世なりとも 君にふた心 わがあらめやも」

進駐軍の兵隊さかんにキヤメラをパチパチ云はしてた。
かなり遅くなつてから帰る．　　恐らく
「早文」七月号と「暁鐘」来てた．後者は沖塩君が送つてくれたもの
であらう．

人間と人間との間のことは決して唯物論にのみには解決つくものでない．
単に肉体だけの交渉といふやうなものはない．
必ず感情が伴う、そしてその感情は決して、その場限りで終結
するものでない．

八月二十一日（水）　晴
谷川徹三「文学の世界」読む．　世界
岩波文学講座　一、二、三巻ぬき読みする．
永淵態六遺作を読む．感服する．
「復員」末尾すこし訂正する．
細田常ム、及沖塩君にハガキ書く．

八月二十二日（木）　晴．
沖塩君より手紙、小説書けとの事．
早速腹案を練る．
「胡沙の花」に前文と後文を加へることによつて、過去の時間を
現在にまで延長さす方法を採る．
全文九枚、調子よく出来上がる．

八月二十三日（金）
終日　仕事．
沖塩君に手紙書く．
佐藤春夫随筆集「随縁小記」読了．
「兼好と長明」及「最近の谷崎潤一郎を語る」はいゝ評論だ．

八月二十四日（土）　雨 後 晴．

仕事、二十七枚まで．

夕食前総持寺墓地まで散歩．

新美、高橋敏両氏より来信

八月二十五日（日）　晴．

仕事四十枚まで．

二宮君より手紙来る．朝日映画に勤めてゐる由．

八月二十六日（月）　晴．

銀座に二宮君をたづねる．まだ出社してゐないので、実業の

日本社に倉崎をたづねる．

茶を喫みながら話す．

二宮君を再びたづねる．二人で銀座に出、茶をのみながら、

一別以来の話、彼も中野の家は焼けた由。

東宝試写室に、朝日映画「かくや姫」といふ影絵映画の試写を

み~~る~~せてもらふ。

別れてまた邦楽座「情熱の航路」といふのを観る。

可もなく不可もなし．

たゞ写真の中に南米（ブラジル）の景色が出るのが楽しかつた。

夕飯頃家に帰る．

今日一日遊んだ。

八月二十七日（火）　晴．

仕事五十三枚目まで．

小林邦氏からハガキ．近日上京の旨．

八月二十八日（水）　晴．

福田夫人来訪．

小林をもてなす為の金~~の必~~を５百要円夫人より借りる．

午后、夫人の息子さん及びその友だちと三人連れで横浜のゲーリック球場へ野球を観に行く．

横浜金港クラブ　対　全慶応

七 対 六 で金港が勝つ．

金港には、若原、柿島、島津、などの古い名が出て懐しかつた．

ＫＥＩＯは、宮武、土井、宇野などが出た．

八月二十九日（木）　晴．

早文編集会議へ行く．谷崎、逸見、浅見、稲垣、井上友、小沼丹、浜野、宮川の諸氏．

帰り浜野と宮川の学校に行きさつま芋とパン御馳走になる。

逸見宅で、 復員」を浅見さんに手交する．

八月三十日（金）　晴．

松村氏から速達あり．小説のことについて話がある故　至急横光先生をお訪ねせよとある．

取あえず松村氏を訪ねる．三越本店前で偶然松村氏と出会ふ

附近のアイスクリームやに寄つて話す．

「母子鎮魂」を短篇のまゝ投げ出すのは素材として惜しいと云はれたのだ相だ．

~~松村氏と別れ先生宅をお訪ねする~~．

松村氏の話、 先生の奥さまからきかれた話として）

先生は母子鎮魂を、線香を立てゝお読み下された由．

粛然たり．

有難きことなり．何よりの功徳なり．百度の読経にまさること

「母子鎮魂」よ、以て瞑すべし！　　万々なり

松村氏と別れ先生をお訪ねする．

（途中理髪館により散髪剃顔す）

一時から四時頃まで先生と二人きり、いろゝのことお話する．
先生は「母子鎮魂はいゝものだ」と仰言つて下すつた．
もうこれだけで十分だ．
文芸春秋と新潮と両方から来てゐるがどちらへ出したいかと云はれる．
自分は鷲尾さんに対するお礼からしても文春にして頂き度いと
お願ひする．
御一緒に出て、附近の闇市にてソバを御馳走になる．それから
喫茶店にてコーヒーを三枚(ママ)もごち走になる。
壁間のデイートリツヒのシャシンを見て、 このデイートリツヒはいゝ顔
してゐる．唇がいゝ、小説が書けさうだ」と云はれる．
先生は卵色の小千谷縮を着て居られる．
これは新聞広告でみて早速買ひに行かれた由．そして、これを
買つた帰りに心臓をわるくして倒れられたのだそうた．
今日はじめてこれを着てみたと、うれしさうに云われる．
先生のお体はまだ十分ではなく、小説は当分かゝれず休息
なさる由．
腕などタヨリない位、細く蒼白い．
楽しい半日を過して帰る．
新宿に出、新宿から桜木町へ出る．
Ｙに会ふ．単純なるものの明るさ、無智なものの快活さ、
肉体の限界の中だけで生きてゐる
トマスマンの主題、
「二重像」と「殻の中」の構成．
認識の悪魔 ― 認識によつて食い殺される．
凡庸なるものの幸福、
マンとフローベル．

九月二日（月）　晴

「胡沙の花」完了、九十二枚.

九月三日（火）　晴

後楽園球場に全早慶戦を観に行く.

３Ａ 対 １ で敗ける.

九月四日（水）　曇 後 晴.

今朝の風は、もうすつかり秋の風だ．例の何とも云へぬあのあれだ.

どうもこいつに吹かれると身がもてぬ．どういふわけだらう.

てきめんにやられるのだから不思議だ．御用心！　御用心！

×　　×

思いがけなく弘谷女史からハガキが来た．無事で満州から帰つて

きたのだ．このひとにはたいへん世話になつた．早速、祝ひと礼とを

兼ねた手紙出す.

九月五日（木）　晴

朝　平野氏来訪．先日の切符の件、高橋君出張のため買へなかつた由、

止むを得ず太田女史に~~たのむ~~依頼状を書く.

彼、こちらの窮状を見兼ねたか、三十円タバコ代にしてくれといつて

ポケツトにねぢこむ．辞退したが是非とれといふので、好意ありがたく

ちようだいする.

母に、ぶどう十円買つて帰る．コロナ一つ買ふ.

小林邦さんから電報来る．カンダから打つてゐるところを見ると

もう東京に来てゐるのだ.

明日朝 都美術館前で会い度しとしてある．やはり絵を見に来たのだ.

エツケルマン「ゲーテとの対話」上巻読了

「胡沙の花」を目白の「暁鐘社」に沖塩君を訪ね手交.

沖塩君と外に早稲田出の編集者（西田君と柳田君）二君と

文学論をたゝかはして帰る.

九月六日（金）

小林に会ひに上野へ行く．彼はさきに来て待つてゐた．

すぐ帝室博物館に入る．

アトリエや美術や美術全集でしか見たことのなかつた、光琳の

例の紅梅白梅の二曲一双の屏風が出てゐた。

これは素晴らしいものだつた．

他に、大雅堂の大きな屏風と同じ蕪村、応挙の大きなもの、

それから麥遷の舞妓の絵が美しかつた．

他に浮世絵がかなり沢山出てゐた．

茶店で昼食をすましてから、二科と院展をつゞけてみる．

ひきつけて放さぬやうな魅力のある絵はなかつた．

二科の寺田竹雄といふひとの少女像が一つ、好ましかつた．

二科では、故島崎鶏二氏の遺作がすこしまとまつて展らんされてゐた．

院展では「文五郎と人形」といふのがよかつた．殊に文楽の人形

の衣裳が落ちついた美しさだつた．

小林は二日に来て、ずつと阿以田治修氏の家に厄介になつて

ゐたのだといふ．大雅堂のものが四点ほどあるから、行つて一緒に

見ないかといふ．

行つてみる．谷中墓地 天王寺のすぐ前のところにある．

静かないゝところた．

生憎大雅は疎開の荷物の奥になつてゐて今日は出せぬといふ

だがともかく上つて話して行けといはれ、上る．

阿以田氏は㊀愛想のいゝ、気の置けぬひとで、フランスの

話などしてくれる．

そこへ池部均氏が訪ねて来る．

それから、古糸源太郎氏が訪ねて来る．

三人の画家の話、面白いのでうつかり長座してしまふ．

三時半頃辞し、小林と二人、帝劇に芸術祭の

出しもの「どん底」を見に行く．

「どん底」四幕、　四時半から八時半まで、四時間）

期待したほどの感動は得られなかつた．

〇〇〇〇〇三島のボポフが一番よいと思つた．

いつたいに新劇の連中のせりふはすぐ「叫び」になつてしまふ．

声が割れて非音楽的になる．―　耳に不快だ．

滝沢のルカも薄田の役者も普通の出来．

小林君泊る．

九月七日（土）　晴．

〇〇小林君帰る．

「殻の中」の構想にとりかゝる．

九月八日（日）　晴

「殻の中」の構想つゞける．

シヨーペンハウエル「意志と現識としての世界」下巻読む．

トマス・マン短篇集III読了．

九月九日（月）　晴．

「殻の中」書き出す．

スタイル、　スタイル、　スタイル

粕谷氏来訪．駅前の支那料理屋で支那そば奢らる．

志賀直哉全集読み返しはじめる．

離れて、そして強く即く　といふこと．

客観を主体的に掴むといふこと、―　従つて、それは単に観ることでも、

単につくることでもない．―　客観を行為することだ．

どこまでも私のはたらきだ．私自身の生活だ．最も意志的な生活だ．

夜、また仕事つゞける．半ペラで十六枚．

聖書すこし読む．

海野氏、児玉氏よりハカキ

九月十日（月）　晴．

日比谷劇場へ「運命の饗宴」を観に行く．これは面白かつた

二宮君を訪ねる．ルパンにて本もののコーヒーおごらる．こゝのマネーヂャーは小説と映画のことに実に詳しく、面白いおやぢだ．

横光先生の「時計」は荷風の「おかめ笹」を現代風にしたものだといふ．

「機械」だけまだ読んでゐないといふので貸す約束をする．

〇〇〇〇〇〇

Ｙ、愛情とは予測だ．想像で ― 従つて創作みたいなものだ．

一定の女人を透して彼はイデァを夢見る．

この場合、 一定の」といふことが限定になる．

どんな女人をとほしてもイデァを夢見るといふことは出来ない．

その大部分は嫌悪と蔑視と情憫と無関心．

絶えず仕事のことが気にかゝり、気持がカラツとしない．

前へ進めぬ時は特にさうだ．

九月十一日

九月十二日　仕事、半ペラで八十三枚まで

九月十三日（金）　晴．

後楽園球場へ職業野球を観に行く．　パシィフィックの小島氏より招待券を貰つた）

セネタース 対 ゴールドドリング は　　三 対 一 でセ軍

パシィフィック　対 ゴールドスターは　四 対 一 でパ軍

「意志と現識としての世界」上巻すこし読む．

九月十四日（土）　晴

神戸君より手紙、信州への招待．

仕事、 ―― 九十九枚で完了．

九月十五日（日）

「意志と現識としての世界」
「聖書（新約）」
「万葉読本」
拾ひ読み

久保田万太郎随筆集「八重一重」読了．

一日ラヂオを聴いて暮す．

九月十六日（月）　晴．

「殻の中」清書にかゝる．

九月十七日（火）
九月十八日（水）
「殻の中」清書．

火　雨．　終夜停電．

九月二十日（金）

嫂中島義雄、阿部武徳の両君突然来訪．

嫂と二人　日比谷公会堂へ日響定期公演をきゝに行く．

（ちようど阿部君も切符を買つてゐたので一緒にでかける）

1. ブラームス「大学祝典曲」これは演奏が粗かつた

２. ラハマニノフ「パガニーニの主題による変奏曲」ピアノはレオシロタ
これは面白かつた

３. ベルリオーズ「幻想交響曲」
これは二度目だ．初演きいた時の方がよかつた．

九月二十一日．　土）

「殻の中」清書完了．五十四枚

桜木町駅から歩き、元町（フェリス女学校、外人墓地）を通つて
兄の会社まで散歩、元町の外人住宅のあたりは一種の特異な
風情がある．外人墓地は入れなかつた．案外、せまい．

中に日本の女を妻にした外人の妻のためにつくつた墓碑銘が、西洋人らしい愛情たつぷりの文句でかゝれてあるのに感心、ノートとりかけてゐるところを、ひとにのぞかれてやめる.

山の上から見下したハマの港、船がいつぱいだ．港内に入りきれず港外なまで沢山錨を下してゐる.

兄の会社（工場）はすぐ海際にあつた．想像以上に大きかつた.

さつま芋などごちさうになり、帰りはまた山下公園、ニユーグラニードの方まで歩く．進駐軍兵士の宿舎をズラリ建築中だ．公園の中も。

横浜の女は日本の男などには屁もひつかけぬといふ風に見える.

万事進駐軍さまさまだ。

この女たちはたしかに、戦後の女だ.

横浜に来ると、戦争に敗けたといふ感じがイヤに強く来る．――

伊勢佐木町へ出、 祇園の姉妹」を観る．シヤシンが古く、且つトーキー装置がわるいせいか、セリフがほとんどきこえず.

今夜も停電.

八月二十二日（日）

岡本かの子集と新潮文庫「雛妓」を読み通す.

かの子のいふ「いのち」 ― わかる.

かの子は、日本の作家にはまれに見る、大さと豊かさをもつてゐる.

主情的すぎるところさへあるが、しかし、それも毅い.

芸にやせるといふよりも芸にふとつた作家だ.

表現が強引だ．色感がつよい．原始への憧憬.

ラヂオをきく.

夕食前散歩.

山田正夫君から二度目のハガキ.

八郎の友人だ.

今夜も停電.

これで五日間つゞく.

九月二十五日.

十時三分上野駅発、十六時三分田中着．小林君迎へに来てくれてゐた.

五月女（さうとめ）旅館．小林君の父君や姉妹の方々にお目にかゝる.

夕方、町を散歩．宿場（北国街道）、坂の町.

こゝの名物はかしぐるみ． さうたいして固くない茶褐色の殻の中に白い脂肪に富んだ果肉が入ってゐる．五日ほど乾して炙つてた（ちと甘い）

夜、小林君の絵を見せて貰ふ． 二重像」はやはりいゝものだつた.

色調はやはり信州人らしくダークだ．ねりこみがきいてゐて強い。

夜、うなぎと白い御飯、特別室、派手な友禅の布団

九月二十~~六~~七日

汽車で小諸行き．懐古園、藤村詩碑、 案外つまらないものだつた）

見晴台からの千曲川の眺望.

小諸町、疎開者で賑やかだ．虚子や深水やその他文人画家がかなりこの附近に疎開して来てゐるとのこと.

一里半の山道を上つて、菱野鉱泉へ．浅間のすぐ麓だ.

薬師館、（~~か~~旅館が二軒その中の一つだ．すこし下のもと温泉旅館だつたところは今日日本医療団の療養所になつてゐる）

岩窟を切り開いた廊下、部屋数はかなり多い． シキ布はおろかしかしどの部屋も荒廃しきつてゐる．電球や電燈の笠までもつて行くのが多いとかで全部外してある．床の間の掛軸にまで墨でいたづらしてある.

カミソリできつたあと、襖などひどいいたみ様だ.

湯はすこしぬるいが温泉くさいにほひがすこしした．夜は皆附近の百姓ばかりだ．ほとんど日帰り客．今日はどこかの会社の公休日か二十三四の若い男女が四十人ばかり来て賑やかだ.

二時間ほどゐて、一人四円、やすいのに驚く.

九月二十六日（前のと入れちがひ）

歩いて上田まで行く．約三里.

途中、 破戒」の舞台となつてゐる姫子沢部落など見て行く.

上田に、佃君を訪ねる．松代の方に行つてゐるとかで不在、よく似た妹さん
にことづけして出る．若林君を訪ねる．仕事場でトロツコにしかれ左脚の~~ネ~~くるぶしの骨を折つてこゝ一ヶ月休んでるとかで寝てゐた．驚く．
母上と弟さんと三人ぐらし．父上は戦地に
行つてる間に亡くなられた由、彼もなかなか責任重くたいへんだ．
生活の度に慣れない仕事もせねばならぬ．その為の今度の災難だ．
お茶など御馳走になつて辞去．
上田の町をすこし見物、小さな盆地の中の小さな町（市ださうだ）だ．
夕方汽車で田中へ帰る．

九月二十八日．
小林君も一緒に、長野へ出る．善光寺見物、参詣人はやはり、かなり多い．
長野は静かな落付(ママ)いた市だ．流石に本屋が多い．
しかし、美人は余りゐないやうだ．これはすこし意外だつた．
善光寺は想像より以上でも以下でもなかつた．まづこんなものだらう．
境内がひどく汚れてゐた．林檎のヤミ屋が沢山かたまってゐた．
一貫目五十五円だといふ．ひどく高いと小林が言ふ．彼のところで買ふと二
十五円で買へる由、もつとも今年は不作で田中はダメだつたが(ママ)
城山公園　こゝは実につまらなかつた．
后二時四十八分の汽車で小野へ．（小林君と別れる）
汽車が名古屋行のため塩尻でのりかへ、すぐ前の上諏訪行の列車にうつる．
小野へ着いたのはもう六時過ぎてゐた．
汽車の時間表を見て昨日電報打つたのだが、その汽車いま走つてないさうで
ちがつた汽車にのつたものだから駅頭に神戸君の姿はなかつた．
道をきゝなから行く途中で、神戸君とその友人の詩人峯村君にうしろから
声をかけられる．今日三度も駅に出てくれた由．
神戸君の家はいゝ家だつた．
奥さんと四才の英明君といふ子供さんの三人暮し．
峯村君もいつしよに十時すぎまで話しこむ．

九月二十九日

三ツ沢峠 ― 勝弦峠 ― 塩尻峠 ― トラックにのせてもらつて塩尻町へ.

勝弦峠からの眺望は実によかつた. 諏訪湖を真下に見下し、八ヶ岳を遠望、岡谷、上スワ、下スワの町.

アルプスは残念なから曇空で見られなかつた.

塩尻町に出、永年念願の吉江先生のお墓に詣る.

先生の御生家をまづお訪ねする. 意外にも奥さまが出て来られる.

昭和十九年三月から孫さんと二人こちらへ来て居られる由.

たいへんよろこんで下さり、是非上れとすゝめられ、三人で上る.

仏壇に飾られた先生のお写真を凝視めてゐる中に遂に泣いてしまふ.

お墓に案内して頂く. すぐ家の前の小高い丘（松林）に三四丁のお墓といつしょにあつた.

黒い安山岩の極めて質素な、何の飾りもないお墓（ 窪田空穂の碑銘）

凌雲院帯星孤雁大居士

清空院抱月貞鑑大姉（貞鑑といふ字が赤い. ）

線香を上げしをんの花を捧げ、水をかけて、合掌.

念永年の念願をやつと果すことが出来、うれしかつた.

おみやげに奥さま御手作りの小麦粉を頂いて帰る.

奥さまは眼をわるくして居られ、字は全くよめぬといふ状態

腰もすつかり曲つて居られた. たいへんなお年より方だ. いたいたしかつた.

いろゝの昔話.

先生がどの位自分たちを愛してゐて下すったか、奥さまのお話しで、いよゝ追慕の情を新にする.

奥さまはずつと、自家の前に立つて自分たちを見送つて下すつた.

塩尻へ来たついでに峯村君のつとめて居る、昭和電工の工場を案内して貰ふ.

石灰窒素の肥料工場. 外に、研磨材、カーバイトなどもつくつてゐる.

峯村君、一々くわしく説明してくれる.

夜帰り、おはぎの御馳走、またおそくまで話しこむ.

九月三十日

前六時五十八分の汽車（中央線）にて新宿 帰る.

信州の旅はすべての点でよかつた ― 自然も人もたべものも.

旅は時々したいものだ. ―― 血液が新しくなつたやうな気がする.

十月一日.

早稲田文学編集会議出席. 浅見、江間、森田、野村、小沼） 谷崎、 逸見、

浅見さんにうちへ来て泊って頂く

十月二日.

浅見さんは高田の馬場へ. ――

自分は信州からのしめじをもつて横光先生のお宅へ.

しめじは先生の好物○○とのことで、もつてきてよかつたと思ふ.

先生は痔がまだよくないらしく長椅子に横になつて居られた.

「人間」の編集長 木村氏来訪.

先生は、この頃何を見ても喜劇に見えて仕方がないと云われる

自分はこの頃何を見ても何だか可哀さうといふ感じがして仕方ないといふも

「きみはおしやかさまだから」と笑はれる.

そして「不動さんを通り越しちやつた人だ」といはれる. 大いに笑つてしまつた.

先生は時々、あの近くの喫茶店のディートリッヒのシャシンを見に行かれるさうだ

「あれを見てると何だか小説を書きたくなる」と言はれる.

木村氏は先生に「自叙伝」を書いてみる気はないかとすゝめてゐた.

自分もそばからおすゝめしてみた.

しかし先生は、いま自分のそんなものより、若い新人の方に書かせた方がよいと言つて、受けられなかつた.

しかし、先生のお体の丈夫なうちに是非自叙伝は書かせたいものだ.

「書くとなれば面白ことはずいぶんある」と先生も自分で言つてる位だから.

しかし、先生の今の健康状態では、仕事は大小によらず命とりにならうな心配が十分にある.

当分は、やはりお休みになられた方がよいと思ふ.

小林、神戸、山内、紅谷、諸氏へ手紙.

若林君にハガキ

十月三日.（四日）　　九月三日病院舩で、

飯河りきさんから突然のハガキ. 満洲から帰つて来たのだ、といふしらせだ.

○○○○○○○○○○○○○○○○○大いに驚く. 早速明日訪ねてみるつもりだ.

十月四日

りきさんを訪ねる. 湘南電車金沢八景で下車.

清泉園といふには或る社会事業団体のやつてゐる、援護施設で、

引揚者と羅災者が大きい学校のやうな建物の中に数十家族入つてゐる.

飯河の母上と、とく子さんも来て居られ久しぶりに御挨拶した.

りきさんは横須賀の方にはたらきに行つて居られる由.

飯河自身も、もう日本へ帰つて来てゐて、いま京都のシンセキ○○○ろに（のとこ）

居るといふことだつた.

今明日中にはこちらへ来るとの事だつた.

これで、日向を除いて、みんなそろふわけた.

二時間ほどお話して辞去.

桜木町へ出、宝塚劇場で「東宝シヨーボート」といふ映画みて帰る.

久ちやんが来てゐた. 正さん胸に水たまつて寝た由、郁子さんが可哀そうだ.

十月五日（土）　晴.　秋天爽やかなり.

新聞、放送ゼネスト第一日.

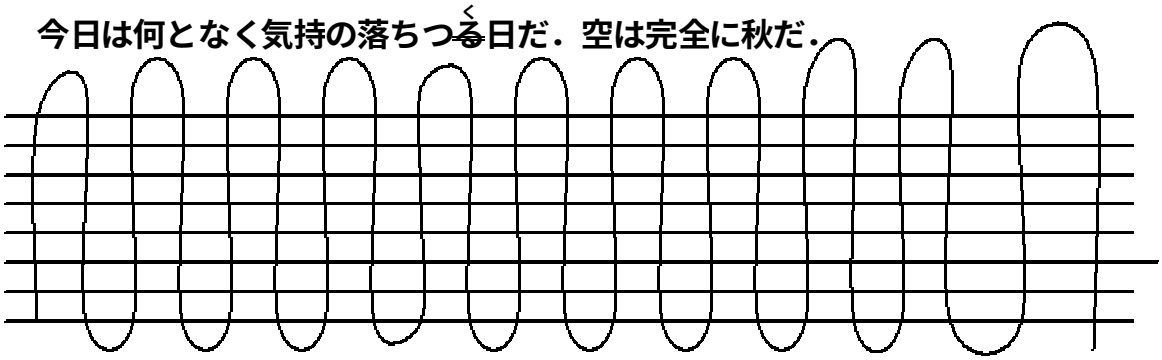
ラヂオは進駐軍向けのだけだ. いつそしづかでよろしい.

福田夫人来訪、タバコ貰ふ.

浜野、住田、山本、諸兄へハカキ.

（住田、山本よりハカキ来た~~ので~~（のでその）返事と浜野には飯河のこと報知）

今日は何となく気持の落ちつ~~る~~く日だ. 空は完全に秋だ.



十月八日（火）　曇

日比谷へ「吾が道を往く」を観に行く．期待ほどでなかつた．

倉崎訪ねる．今日細君出産の由．　予定）

新田潤氏来る．いつしよに銀座に出て茶を喫む．そこへ寺崎氏も来る．

久しぶりで見る銀座、和服を着た女が多くなつた．

美しい女といふものはなかなかゐないもの．

皮膚がたるんでゐるのが多い、唇が汚い、眼つきがどうも涼しくない．

別れて、二宮氏訪ねる．不在、飯河夫人が帰つて来てゐること置手紙．

名画座で、　人生は四十二から」をみる．同じくレオ・マツケリーのものだ．

これもあまりよくなかつた．

倉崎から貰つた「文学季刊」よむ．よい出来栄だ．

停電　　母と烈来る．

十月九日（水）　曇

「殻の中」書き直し、　樫山の出て来るところ削除）これは五日からはじめた

阿部君来訪．　　もの

魯迅全集第一巻読了．これは三度目だ．

「阿Q正伝」と「石鹸」といふのがやはりいゝ．

何よりも文学といふものに対する魯迅の態度にある「骨」、そのつよさ。

浮き上がりが少しもない．ピツタリ即いてゐる．

神戸君よりハカキ、句が書いてある．

十月十日（木）　曇

「殻の中」書き直し完了．四十五枚

「暢気眼鏡」再読．

平野氏来訪．　　夜中

夜、烈を抱いて寝る．　烈しきりに乳房をさぐりて来る．

夢中なるなり　まだしきりに横腹を蹴らる．

若き母の辛労、これによつて想察に堪へたりて．

十月十一日（金）　曇

式場隆三郎「宿命の芸術」読了．

露伴「洗心廣録」読む．

入浴．

十月十二日（土）　曇

露伴「洗心廣録」読了．

森田たま随筆集「もめん随筆」及「竹」続いて読了．

いままでたまを毛嫌ひしてゐたがこれを読んで好きになつた．

単なる理解ではなくその理解の温かさ、――　女性．

山氏先生よりハガキ

十月十三日（日）　晴．　小春日和．

兄、あねと共に西荻窪庵原家へ行く．

預けてありしふとん　チツキにて送る．

吉江先生の全集及萩原朔太郎全集その他少しリユツクサツクにつめてもつて帰る．自分の今までに書いたものは見当たらず、やはり焼けてしまつたのだ．

夜、吉江喬松集（日本文学全集）及明治文学会の「吉江喬松追悼号」よむ．

在りし日の師の温顔日前に在る如き心地す．追慕の情切なるものあり．

十月十四日（月）　晴．

昼食後、実業之日本社に倉崎訪問．スタイル社に行つてゐるとて、そこまで追ひかける．

「田村」に行き、女児出産のお祝ひの品（ガーゼ一反）を渡す．

ついでに原稿（殻の中）を渡したが、これの掲載は来年五月号との事

にて、急を要するものにあらねば、これは他へ出すことにして、また返して貰ふ　桜木町に出る新橋駅前にて、三角くじを三枚買ふ．タバコあたる。

桜木町に出る．兄と偶然切符売場で会ひ共に帰る．　一枚だけ

夜、床の中で古いワセダ文学などすこし読む．

十月十五日
十月十六日― 仕事．　題未だきまらず）　　手記
十月十七日 たゞ「仏壇に関する一小説家の告白」といふ副題を与へようと思う
　書簡体　―　作者と私と彼とは何れも同一人なり．
　嘉村磯多全集第三巻読了．　十五日庵原家よりとつて来たもの）
　吉江喬松集　ひろい読み．
　吉江先生の奥さまにお手紙書く．

十月十八日（金）　晴．
　昼食後　川口に粕谷君訪問　生憎不在、阿部武伝君も来てゐた．
　桜木町へ出る．
　テーヌ「作家論」、パルザツクとスタンダール）読了．
　　パルザツクよりもスタンダール
　萩原朔太郎全集の再読をはじむ．
　塩浜君より久しぶりに来翰、彼は結婚した由．

十月一九日（土）　晴．
　仕事
　「風雪社」より創作依頼の手紙。
十月二十日（日）　晴
　のり子さんと二人で下の茶の間の大掃除．
　一日かゝる．

十月二十一日（月）　晴
　仕事、昼食後　散髪 ―― 入浴、安藤にてココアのむ．
　塩浜君に手紙、風雪社に創作承諾のハガキ．
　萩原朔太郎全集「古典（俳句）鑑賞論」読む．
　夜　また仕事．

十月二十二日（火）　雨．　　「仏壇」 昭２２・３、 新潮」）

朝から冷雨、ひどく寒い．羽織をかけ足袋をはき毛布をかぶつて
仕事．
午後三時　仕事完了 ― 四十九枚
題名を「書翰」として副題として「或る仏壇に関する一小説家の手記」と
いふ風につけようと思ふ。
帰還以来の第六作なり。一ヶ月一作の割合なり．多作といふべく、
寡作といふべし．

十月二十四日（水）　雨

冷雨を冒して東京へ遊びに出る．丸ノ内名画座にてソニアヘニーの「きらめ
く銀星」といふスケート映画を観る．スケートと音楽がたのしかつた．
二宮君を訪ねる．
銀座の古本屋にてピカソ画集（英語版）と土田麦遷画集（大版）
などゆつくりみる．
茶をのんで帰る．(和歌及俳句)
萩原朔太郎全集、古典鑑賞編及び詩集上巻　読了．
小林秀雄「ドストエフスキーの生活」再読了．
嘉村磯多「一日」読了．

十月二十五日（木）　晴

雨晴れ．好天なり．
午前中山本に手紙書く．併せて、送つて来た小説二作に対する
感想を書く．何れも惜しいところで失敗の作となり、そのことを書き
もう一度送り直して作者の一考を望むこととす．
午後　日響へ．
　　ベートヴェン「第七交響楽」リスト「第一ピアノ協奏曲」 永井進）
　　（これは面白かつた）、ムソルグスキー「禿山の一夜」、及「土耳古行進
　　曲」 これも面白かつた）
ローゼン外遊のため指揮者山田和男、身振り大げさにてジャマになつた．

帰途　あね、阿部君と三人でコロンバンにて茶をのみ帰る．
途中ギンザにて、偶然に吉村君及倉崎に出会ふ。
（書き落し）
日響へ行く前、日本橋三越にて創元社主催の梅原竜三郎小品展を
観る．何れも氏の「彩戯」と称せらるゝ小品のみ（三十九点）なれど、
みな、面白かつた．ほとんどみな、氏独特の「赤」を主調とした画のみなり．
強烈な個性なり．就中、赤絵の茶椀を画いたものは不思議な美しさだつた．

十月二十六日、 土）　晴
仕事、 仏壇」の原稿（再）にかゝる。十枚．
かなり余計なことを書いてゐる．削る．
萩原朔太郎全集 詩集下巻（青猫、永島）読了．
詩を書くが故に詩人になるに非ず．詩人なるが故に詩を書く詩人なり．
吉江喬松全集「文芸評論」読む．
コルネイユ ― モリエール ― ラシイヌ．
ボワロー
仏蘭西古典主義 ― ルイ十四世 ― 十七世紀。
山本に手紙、原稿送り返す．
十月二十七日（日）　晴
仕事、二十枚まで．
母来る．
峰村、児玉両君から来信（二十五日）

十月二十八日（月）　晴
仕事、三十三枚まで．
粕谷氏来訪、夕食を共にす．
吉江全集読む．

結婚のこと、従妹といふひとをすゝめられ、そのシャシン
までもつて来てくれたが、シャシンを見ることも結婚
のことも断る．
貢君に漢和辞典　一冊進呈す．

十月二十九日（火）　晴．

仕事 ― 夕飯までかゝつて完了、四十八枚．　書翰）

文章を出来るだけ詳密にしようと思ふ心と出来るだけ簡素にしようと

思ふ心とごつちやになつて、だんだら模様のやうになる．

フローベル「ジョルジュ・サンドへの書簡」読む．

　これは何辺よんでもよい手紙だ．作家の聖書だ。百読すべし．

吉江全集読む．

十月三十一日（木）　久ちやんを訪ね

高島屋万世倶楽部にのり子さんからのことづけものを渡す．

帰り、宮川を訪ねる．昼食を共にし雑談、彼の近作「鈴虫」を原稿にて

読む．ユーモア物語とも謂ふべきもの．

桜木町へ出て、日活館で「わが青春に悔なし」を観る．

京大事件と尾崎秀実事件をモディファイしたもの．　久板栄次郎と黒沢明）

主演の原節子は、今までの中の一番の演技ならん(表情はすこしばたくさいか)

帰り猛雨、橋びつしよりぬれて帰ると、飯河が来てゐた．二時間ほど

前からまつてゐた由．

別離以来四年目だ．満洲から引揚の苦難物語．

彼　泊る．

十一月一日（金）　晴．

飯河と一緒に浜野を訪ねる．昼食を共にしてから、三人でギンザに二宮君を

訪ねる．附近の茶店でしばらく談る．これに日向がかはれば満洲四五人組

が揃ふわけだが‥‥。

「カラマーゾフの兄弟」全四巻）読了．これで四度目だ。

　第一回目はアリヨーシヤに、第二回目はイワンに第三回目はスメルジヤコ

　ーフに　そしてこんど第四回目にはミーチヤにもつとも興味をもつた。

　「二つの深淵を同時に見ることの出来るロシヤ人」の典型的なタイプはミ

　ーチヤに生かされてゐる．― 神へ通ずるもつとも近い道はこゝからだ．

　　（それはもつとも遠いやうでもつとも近いのだ

　　この逆説はどうやら真理だ ― かなしいかな、さうだ）

十一月二日（土）　晴．

早慶戦を見に行く．信濃町駅で十時までといふ飯河との約束だつたが彼例によつて来ない．十時半まで待ったがついに見えぬのでひとりで入る．久しぶりでの早慶戦の気分 ― わが失はれし青春をなつかしく思ひかえす．２Ａ０勝て　第一回に連続三安打で入れた二点が最後までものを言つて勝つたわけだ．　岡本は全然危な気がなかつた）

×　　×

早文の埋草（三枚）に書くことをいろゝ考へてみるが、頭は空っぽだ．
文字通り空っぽだ．思想は愚か感想のカケラさへもない．
ただ何となくボーつとしてゐる．
非常に危険だ．完全な無風状態だ．
デーモンを呼べ！
フローベル「ジョルジュ・サンドへの書簡」を読みつゞける．
ドストエフスキー「悪霊」を読みはじめる．
小林秀雄「ドストエフスキーの生活」読了．
　　「生きた」といふことの確実に言へるひと、すこしもアイマイでない。
その思想は生の現実からのみ生んだ人物、―　体当りといふのはこの本だ。
如何に生くべきかといふことよりいかに生きざるを得なかつたか．

十一月三日（日）　晴

新憲法発布．
天皇陛下の勅語．たいへんお若い声、しかし読み方は余りお上手ではない
文化国家 ― しかし、 権威」の伴はざる文化は果して文化か．
ラヂオで早慶戦をきく．二対０で連勝、同時に優勝
母、あね、高無のところで食べたしる古に中毒、烈しき下痢と嘔吐
二人とも寝る．アドソルピンとパピナールの注射にてやつと落ち着く．

十一月四日（月）　雨

母、あね、終日臥床

仕事にかかるため机に向ふ．一行も書けず．

早文の雑文（三枚）書く．「日本人の壁」といふ題．

一体日本人には「思想」といふものがあるのか．

神とか悪魔とか原罪とか救ひとか―これらはすべてあちらのものではないか．

「生きる」―　といふこの言葉自体だつて何となく新劇の科白じみたキザなひゞきをもつてゐるではないか．

如何に生くべきか ― 日本人はこれを本気で考へたことがあるのか．

人生 ＝ 娑婆、現実 ＝ 浮世、倫理 ＝ 義理、自然 ＝ 人情

日本人は未だかつて一度も「壁」に頭をぶっつけたことのない人種なのだ．

ニーチエ、ドストエフスキー、ショーペンハウエル、カント、ベルグソン、モンテーニユ、日本の最大の思想家は兼好法師一人位のものではないか．

日本人の楽天性と浅薄性とは裏腹なのだ．

志賀さんをまた拾い読みす．　　メリメ「エトルリアの壺」読む．

「暗夜行路」前篇読み直す．

何よりもこの「実感」！　とにかくこの実感が問題だ．つかまねばならぬのは之だ。

仕事、結局一字も書けず ―― 貧困　呆然たり。

十一月五日（火）　曇

母、あね、快癒．

~~次の日~~仕事一字も書けず．恐ろしい貧困。

ギリシヤ・ローマ神話など読む．

十一月六日（水）　雨．

朝から机に向ふが何としても書けない．書かうと思ふことがあるのだが、ちよつとそこから離れてみると、ツマラナイことのやうに思はれて来る．切実でないのだ．　　文字の飾りみたいなものは書き度くない．

作家といふものは、やはり「不幸」が必要なのだ．

追ひつめられなければダメなのだ．

福田夫人来訪、「コンソレーシヨン」といふ題の四十二枚のものもつて来られた．　　読んで批評など書く．　今度のもの割合いゝと思つた）

志賀さんを読む ― 何といつてもやはりこの実感が尊い。

十一月七日（木）　雨．

朝から何となく気持ちが落ちつかぬ．　弁当
のり子さんに急にひるめしをつくつてもらつてともかく外へ出る．
横光先生に「仏書簡」を読んで頂くつもりでそれをもつて出る．
はじめ、創元社に村松氏を訪ねる．明大前に一間借りて家族の
方をよびよせた由、よかつたとよろこふ．ひるめしをいつしよに食べる
その時の話から横光先生はずつと胃を悪くして、面会謝絶の由、
今日はお訪ねせぬことにする．
附近の茶店でお茶をごちさうになり別れる．
東劇の五階でソビエート映画の「スポーツパレード」をやつてゐると
いふのでそれを観に行く．
天然色映画だつた．　これは一九四五年度のスターリン賞をとつた映画ださう
だが、技術的にはアメリカなどからはまだはるかに劣つてゐる．）
内容も、たゞスターリンの前でソビエートの各民族がマス・ゲーム
みたいなものをやるだけのことで、とんだり、走つたりするのではなかつた．
たゞ、クレムリンの宮殿と「赤い広場」を心ゆくまで眺めることが出来て
ひどくなつかしい気持だつた．　トルストイやドストエフスキーの小説を思ひ
出した）　それと、スターリンの顔は実にいゝ顔で見とれた．
何とも云へぬ人間味が全身ににじみ出てゐた．
スターリンも大分年をとつた．　今度の大戦の英雄たる
それからスターリンの左右に並んだ将官連中がみんな帽子を
あみだにかぶつてゐるのが、いかにもロシヤ的で、親しみ深い感じがした
モロトフだけが背広で終始唇を固くむすんでニコリともしなかつた．
ソビエートの若い女性はみな体が立派だ．
その何千となく盛り上がつた乳房の素晴らしい行進！
すぐわきで見てゐた一学生たまりかねて、
「すげえなァ」と声をあげた。

〇〇〇〇吉江先生の奥さまから永いお手紙が来た.
あのお墓参りがこんなにも奥さまによろこんで頂けるのは、やはりお参りに
行ってよいことをした.
これからは信州へ行く度　お墓詣りに行くことにしようと思ふ。
それから放送局の海野君から、ラヂオの放送物語（二十枚 ― 二十五枚）
を一つ書けと言つて来た.
自信はないが一つ書いてみると返事した。
十一月八日（金）　晴.
午前中、放送物語の構想考へる.
兄の遺言状のこと書かうと思ふ. 題も「遺言状」とした.
半ペラで十枚ばかり書く.
午後から早文編集会議へ.
谷崎、辺見、稲垣、浜野、飯河、野村、小林の諸氏
いつも二十枚だ三十枚だのと言つてゐないで、八十枚でも百枚でも思い切つて
書かせたらどうだといふ. ――　皆の賛成を得た。
殊に今日は浜野がよくしゃべってくれた。若いものの気持ちを代表して
稿料を貰ふ. 二百四十八円也、かへつて来てはじめてかせいだ金だ。
帰り、浜野、飯河、野村と新宿へ出、茶を喫む.
野村君と二人で横浜までいつしよ、早川の駅で電車をまちながら
いろいろ小説のことなど話す.
彼は十九世紀のロシヤ文学を今読み直してゐるといふ。
「現実」が確固としてゐた時代の作品だ.
しかし今はどうか、 現実」そのものを作家は信じてゐないのではないか.
明確な人間像を作家は果して眼の前に見つつ書いてゐるのかどうか.
「陰にこもつたデカダンス」しか、ぼくは書けないと思ふと答へる.
希望などといふものは何もないのではないか.
一歩一歩日本はフィリッピンに近づきつゝあるのではないか.
ともかく、ぼくはデカタンスを書く、もうぼくらの生涯は終つたのだ.
せめて哀しい絶望の唄を歌はう.

桜木町へ出る．　　薄ねずみの　　桃色

Y― 病気はすつかりよくなつたといふ スーツとブラウスの仮仕立を着てゐた

ボタンもなにもまだついてゐないやつだ．三千円かゝつたといふ．

その楽天性 ― これは後天的なものではあるまい．

気質であつても、今は尊ぶべきものだ．降参する．

観念ではなく直接に肉体で生きる生き方―これを動物的といふのか．

哀れとは思はぬ．　　そしてそれの来るのを待つ．

肉体が敗れたところから観念も生れるだらう．

しかし、之は愛か放蕩か．― 何れにしても罰はある筈だ．

十一月九日（土）　曇．　半ペラで

「遺言状」にかゝる．　二十五枚まで書いたところへ阿部君来訪．

早慶戦をしきりに口惜しかる．

送りかてら下まで行き、安藤にて茶を喫む．

別れて古本屋を素見．

辻 永の「万花園」を欲しいと思ふ．

金がほしいと切に思ふ。

帰つて来て、仕事つゞける．

四十三枚書き上げる．

清書は明日だ．多分二十三枚位になるだらうと思ふ．

放送物語だから眼よりも耳に快い文章をつくらねばならぬ。

十一月十日（日）

「遺言状」清書．

下の鶴扇寮から発火、半分焼けてとまる．

十一月十一日（月）

仕事つゞける．

飯河来訪、昼食をいつしよに食べたあと桜木町へ出る．

港へ行く．ポモナ・ヴィクトリーといふ七千トン位の船が岸壁につながれて

兵隊が着いたのか、出て行くのか、沢山のつてゐた。

伊勢佐木町をぶらつき茶店に入つて茶をのむ ― 急に雨がふつて来た.
飯河を日の出町の駅まで送つて別れる.
夜床の中で芭蕉講座第一巻すこし読む.
　芭蕉の個性の確立までの経路.
母、三崎へ ― .

十一月十二日（火）　曇.

「遺言状」清書終る.　二十四枚.
「殻の中」四十五枚を風雪社に送る.
入浴.
山本よりハガキ.
長見へ手紙書く.

十一月十三日（水）

悪霊第一巻読了.

十一月十四日（木）　晴.

日展を観に行く. ― 驚くべき低調、無力.
わづかに第一部深水の「銀河祭」のすこしばかり品のよい美しさのみ.
それから広田多津といふひとの「浴み」の母子の愛情の和やかさ.
もう一つ、笠原可於「母と子」― これらは別なイミで自分の足をとめた.
第二部（洋画）は全部落第、わづかに野間仁根の「島山の眺望」の一作のみ
とるとすれはとる以外、何もなし.
第三部 ― 兄の友人 小島正典氏の裸女の立像あり.
第四部 ― やなぎにつばめを配した利久屏風.
　　いちじくの藹絞染二枚折屏風
　　その他藍染屏風、壁掛、手筥、釜、皿、水差、花器、花盛、
　　置物等.
こゝを出て帝室博物館へ入る.
　長谷川等伯「松林図屏風」
　伝　永徳「檜図屏風」

大雅堂「山水図」
その他、高山寺蔵「鳥獣戯画図」
崋山「佐藤一斉像」
浮世絵（春信、清長、歌麿、豊国）
　上野公園漫歩 ― 不忍池の大半はうまつて畠になつてゐる．
　帝大の建物がすぐ眼の前に見える．
　西郷さんの銅像の下に浮浪児の郡、㊀難民母子．
　地下鉄にて浅草へ出る ― 地下道の悪臭、鼻をつんざく如し．
　難民ごろごろ寝てゐる．―　そこを通るひとびと、何れも鼻口を掩つて
　通る．　― 事実の世界と観念の世界．
　六区漫歩、大群衆、古着屋が軒並、
　ちやちな冬オーバー一着三.五七〇円也．
　隅田川をみて帰る．
　浅草の哀愁 ― これは何故か．― むやみに放蕩がしたくなる．
　わが青春の古戦場なるか．

十一月十五日．　金）　晴．
　紅谷女史 突然来訪．満洲引揚の数々のエピソード．―
　天晴小女傑なり．― 留守中の世話の御礼その他．　㊀㊀㊀㊀㊀
　夕食を共にし、七時半頃帰る．駅迄送る．
　すこし老けた．しかし相変らずだ―りこうバカだと自分で言ふがこのバカは
　しかし尊重すべきものだ．― 例によつてでかい眼玉からさかんに涙を出す．
　女史の涙腺はきはめて脆く出来上つてゐるやうだ．
　しかしどこまでも女であるところがよいのだ．― ひからびないところがよい．
　悪霊第二巻読了．
　文芸春秋鷲尾さんから手紙 ― 「母子鎮魂」は十二月号にのせるとのこと
　すぐ御礼状出す．
　飯河からハガキ．
　「風雪社」から原稿とゞいた旨のハガキ．

十一月十六日（土）

悪霊第三巻読了

日向のお母さんに、安否問合せの手紙出す．

十一月十七日（日）　雨．

悪霊第四巻読了．

スタフロギン　シャートフ　キリーロフ

ピョートル

ステパン氏 —— 私

ヴァルウァーツ大人

スタフロギン　リザヴェータ　レビァードキナ　ダーシヤ

それぞれの人間の極点 —— その追い詰め方．

人間の日常生活の日常性の完全な切り捨て —— といふよりその燃焼

心理の陰影のとらへ方．—— 予測と謎．

局面のどんでん返し —— 劇と波瀾

「頽廃は神に通ずる近道」なのか．

神の問題 —— 従つて悪魔の設定．

ある人間がある思想を、持つのではなく、ある思想がある人間を呑むのだ．

—— 思想とは本来斯くの如きもの．

憑かれたる人々 —— 生きるとはこういふことなのだ．

十一月十八日（月）　晴．

「白痴」第一巻から第四巻まで一気に読了．

ムイシユキン —— アグラーヤ

ラゴージン　ナスターシヤ

ムイシュキンは実在する．—— 可能性としてよりも むしろ機能として．

ムイシュキン —— ~~ドミートリー~~ アリヨーシヤ

ラゴージン —— ドミートリー

スタフロキン —— イヴァン

日常性の蔑視．—— 従つてこゝには現実的な倫理は問題にならない

何故ドストエフスキーのものに「深さ」を感ずるのか．

「深さ」とは何か．― ジイドの言ふ「真面目」と「厳粛」との差．

何故ブールヂェは読めないか．― 単にまじめだから。

ブールヂェよりはスタンダール．

パルザックやゾラよりもフローベル．

× × ×

ニーチエ「人間的な、余りに人間的な」を拾い読み．

愛されたいといふ欲望は最大の自負だ（独りきりの人間）

のり子さん、浅田さんのところから高見沢版の「セザンヌ画集」 後期）を借りて来てくれる．

セザンヌの画を観てるとフローベルの小説を㊀聯想する．

「物質」にまで至つたその構造性．― ヴァレリーの謂ふ「厳密」

心をのびやかに解放するのではなく心を厳粛に緊張せしめる．

一つの林檎は尊厳の実体となる．

「静物」は倫理となる．

寺田寅彦全集　拾い読み．

十一月十九日 → 万世倶楽部主催の音楽会へ行く．― 刈崎静子 ― 松隈陽子 ― モギレスキー ― ~~急に胃が痛くなつて来た~~

十一月二十日 ― 胃痛の為終日臥床．

十一月二十一日

十一月二十二日（金）　雨

日響定期公演を聴きに出かける．

チヤイコフスキー　第六交響曲（悲愴）

マーラー　亡き児を思ふ歌（バリトン 中山悌一）

中山は若い（二十六才位ではないか）が日本人ばなれしたバリトンをきかせてくれた．有望な新人だ．態度も真摯で気持がよい．

ヴァグナー「マイスタージンガー」

十一月二十三日（土）　晴　　新嘗祭

松村泰次郎氏を誘つて横光先生を訪ねるべく、同氏宅訪問（井之頭線明大前下車．三浦といふ人の一室を間借りしてゐる）.しかし生憎不在

下北沢まで電車で戻り、古本屋などを素見、いゝ本はない.

古着屋が軒並に出来てゐるのに驚く.

喫茶店ロリガンにて昼食、こゝはレコードをきかせてくれる.

メンデルスゾーン「ヴァイオリン協奏曲」

またぶらぶらと散歩しながら横光先生訪問．先生は胃病のため、ずつと面会謝絶であつた由、どうかと思つて奥さまに容態おたづねしてみるこの二三日来すこしよい方だといふこと、ともかくお顔だけ見て行かうと思ひ上がる．　　先生はひどく憔悴して居られた.

胃と歯と痔と心臓と ―― 先生の体はすつかりこわれてしまつてゐる.

もつと積極的に治療しては如何かと言ふと、 当分病気に対して無抵抗主義で行く」と言ふ.

胃がわるいと気分が絶えず不愉快で、ひとに会つて話をするとひどく疲れるといふ　おはぎなど御馳走になり、三十分ほどしてすぐおいとまする.

何だか心細い.

先生はこゝ当分何も仕事しないつもりだと言はれるが、それがよいと思ふ.

胃病には考へるといふことがいちばんいけないのだが.

音楽でもおきゝになつたらとおすゝめするとラヂオのレコード音楽だけはきいてゐるといふ．外へ出るのは足がふらついてゐてとてもダメダと云はれる.

見てもらひ度いと思つて来た原稿（書翰）の話をすると、新潮の斉藤氏のところへ送れと仰言る．―― その気になる.

早く元気になつて下さればいゝが．―― 当分はムズカシイやうに思はれる.

帰り電車の中で、美しい人妻を見る．夢見るやうな眼をしてゐた.

しかし、いつしよにゐる御亭主がひどくイヤ味な感じの男で、この夫人が哀れであつた。

しかしたまに外へ出てこういふ美しいひとを見ると、何だか心楽しいものだ.

和服を着た女がたいへん多くなつて来た ―― 寒くなつて来たからだらう.

鶴見へ帰つて来て、その足ですぐ総持寺へ行く．

いてふが美しく色づいてゐた．境内は野球仕合が十組も(ゐて)賑やかだ．

本殿の石段に腰を下してしばらく見物．

すぐそばに参詣と遊楽を兼ね(ね)て出て来たらしい三組の若夫婦から

小説のヒントをうる．

いはゞトニオクレーゲルの感情だ．― 幸福への(この世の)(嫉)妬ともいふべきものだ．

ミューズの神は嫉妬深い．(〇〇)自分以外のものを愛する者には直ちに罰を

食はすのだ　　絶対に詭弁しなければならぬ．

フローベルとトマス・マン．

作家は何らかの意味で現世を超越しなければならぬ．― 特に現世の

幸福といふやうなものを．

覚悟と意志が必要だ．

帰り安藤にて茶を喫み豊国通り素見．

花屋の飾窓をのぞく．黄菊、白菊、ダリヤ、カーネーション、水仙、百合

中に見なれぬ花がある．店員にきいてみる．

カトリアといふ洋(〇)蘭の一種だつた．淡紫紅色で花弁が五枚、中一枚は

房のやうに捲き縮まつてゐる．　蝿取草のやうに）

専ら進駐軍用に供せられるものでタンスパーティーや婚礼などに用ひられ、

上衣の胸にコンサーヂされるものだといふ．

一本 百円也、といふ値段だ．

寺田寅彦全集読む．

チエホフの愛人への手紙．

エミール・ベルナールの「セザンヌの回想」　読む

芭蕉講座

　　芭蕉正風の第一句は、

　　　雲とへだつ友かや雁の生き別れ（見おほひ）

　　ならんか．

十一月二十五日（月）　晴．　　昼飯持参で

㊀㊀㊀㊀文芸春秋社に鷲尾氏を訪ねるために家を出る．途中、総持寺の墓地を見る．　小説のためなり）

総持寺前の石材店に入り、墓石（石屋は石塔といふ言葉を使つた）のことに関していろゝきく．親切に教へてくれる．

「あんたはいつたい何をする人です　？」ときかれ、　ちよ調べてつとものをゐる」と答へる．すると、わざゞ石の標本など沢山とり出して来て見せてくれる　　一々ノートを㊀とる．

これによると、石塔は福島産の黒花崗を第一とし、真壁の小花崗、茨城の福田花崗を大衆的なものとするやうた．

外に、静岡の原、沼津、真鶴産の小松石、大阪方面の木谷花崗、岡山の万成石等がある．

文春は幸ビル三階に移つてゐた．　大阪ビルは進駐軍に接収されてゐた．）

鷲尾氏はまだ出社してゐなかつた．

銀座全線座にて「スエズ」をみる．スペクタクル。洪水のトリツクがよく出来てゐた．

再び文春を訪ねる．鷲尾氏に面会、久潤を叙す．

「母子鎮魂」の稿料（一枚三十円）を貰ふ．前払なり．

原稿は今日検閲が済んだ由、十二月にのる予定の由．

大変忙しさうなのですぐお暇する．

東劇に行き、十二月新派祭の切符四枚買ふ．

―（ 長蛇の列、一時間以上またせられる．

桜木町に出る．

今まで通つたことのないやうなところを歩く．

幻燈の街、――　Y

帰り省線の中で発車間際にとびこんで来たまだわかい女 ― すぐとなりへ腰をかけ、黒チャンに追つかけられてこはかつたといきなり 話しかける東京から今日はじめて 横浜に出て来てこんな 目に会つたので 、すつかり驚いたと、いやに陽気に話しかける．ひとりで大きな声を出して笑ふ

かなりキレイだ．みなりもちよつとしてる．
ひどく賑やかな女だ．〇〇いやに人なれしてるところからみると、高家の若奥さまか　何かと合槌を打つ、―― こういふのもなかなか面白いものだ．
帰つて、母、兄、のり子さんに、お子使少々、あげる．

十一月二十七日（水）　豪雨．　六年ぶりの大雨なりし由）
〇〇招待を受けて、野方の高橋敏君宅訪問．
三年ぶりで顔を見る．ちっとも変つてない．京子夫人は流石に変つた．
いゝマゝさんぶりを発揮してゐる．千佳子ちやんといふ女の子（一年一ヶ月）がひどく可愛い．
たいへんな御馳走になる．昔のシヤシン帳など沢山見せて貰ふ．
雨ふつて遅くなつたからとまつて行けとすゝめられ泊ることにする．
十二時頃まで話す．
十一月二十八日（木）　晴．
敏ちやんと新宿に出、旧ムーランルージコ（今は変つて劇団小議会）を観る．
有楽品川にて別れる．
十一月二十九日（金）　小雨．
義豊の七年忌なれば 母、兄、嫂と四人 東中野松源寺（さる寺）へ、
行く．　五軒並んでゐた寺の中　四軒焼けてこゝだけ残つた）
和尚不在のため墓参だけ。来て
墓地のすぐそばまで焼けてゐたのに、よく助かつたものだ．墓は少しも破損してゐなかつた．苔がすこし生えて、落ち着いてきた．
線香ときしみを供へて帰る．
十一月三十日（土）．
霜が真白だ．朝方の気温四度、ひどく寒い．
終日 無為、火鉢のそばにかじりついで過す．
十二月一日（日）
午後から兄と二人 桜木町に出かけ、新しく出来たグランド劇場といふのに入る．　ゴールデンボーイ」
留守中、岡枝英元君が訪ねて来た由．

十二月六日．電通ビル西日本新聞に岡枝君訪問、不在．
朝日映画に二宮君を訪ねる．ちようど飯河が来てゐた．三人で茶を喫む

十二月九日（月）　晴

新潮社に原稿をもつて行く．編集の斉藤氏、こちらが紹介状も名刺ももつて行かぬものだから、多忙を理由に会はぬ．代って小林といふひとと会ふ．
多少の屈辱を感じながらともかく原稿渡して帰る．
「小林氏曰く「永い間お書きになっていらつしやるんですか」
自分「永いことやってゐます」
小林氏「どこかに発表されたことがありますか」
自分「あります」
小　「同人誌か何かで　？」
自分「　うなづく）」しかし顔は赤くなつてゐた。恥づかしいことをしたものだ．　原稿はもつて帰った方がよかつた．帰り何となく腹が立つ．
神楽坂はかなり急な坂だと思つてゐたが両側の家がすつかり焼けて坂だけになつてみると、たいして急な坂でもない．錯覚だつたのだ
電通ビルに岡枝君訪問　再び不在．
倉崎を訪ねる．茶をのむ．彼は今日ボーナスの日だつた．
桜木町へ出る．日活館にて「北海の子」を観る．活劇なり．
Ｙをたづねる．家へ帰つてゐて不在．帰る．これは何だ。
風が出てひどく冷えて来た．

×　　×

仕事すゝまぬので毎日が空虚だ。小人閑居為不善、その不善もしない．からつぽだ．今に罰が当るだらう．

十二月十日（火）　晴．

仕事にムリにとりかゝる．今まで三度かゝつて三度ともあとのつづかなかつた「追跡」だ。
しかし、一日机に向つてみて、主題がハツキリして来たやうだ．これならも㊀一度書いて行けさうに思ふ．

「事実」によりかゝつてゐなくては安心が出来ないといふのではまだ、ほんとの創作家ではないだらう．もつと虚構を信ずることだ．むしろ虚構以外に芸術の真実はないと信じてかゝるべきだ．

　　ウソから出たマコトだ．ウソを本気でつくのだ．

半ペラで二十五枚まで書く．

十二月十一日．　水）　晴．　　帰り本を九冊ほど借りて帰る．

「追跡」半ペラで六十四枚まで

福田氏宅へ薪と練炭を分けて貰らいにのり子さんとリヤカーをひいて行く

十二月十二日．　木）　晴

「追跡」七十五枚まで．阿部君来訪、例の三宿町青年会のことで、もうイヤ気がさしたやうだ．人間といふ奴がなかなか勝手にならないものであることを知つただけでも、これ幻滅はプラスだと思ふと言ふ．しかし、阿部君は幻滅はマイナスでプラスとは思はぬ風だつた。年令の相違か．

散髪と入浴．

十二月十三日（金）　晴　　超満員の盛況だ．

昼食後、母、兄、嫂と四人で東劇の「新派祭」を観に出かける．

演し物は、

１．北條秀司作「歳月」一幕　　水谷八重子と花柳

２．鏡花作「婦系図」湯島天神境内、一場．

今年七十六才の喜多村がお蔦、柳か主税をやる．

喜多村のお蔦は到底七十六才の男とは感じられぬ

驚くべきものだつたか、しかし、まともには見てゐられなかつた．

むしろ感覚的には不快だつた．

３．川口松太郎「鶴八鶴次郎」　花柳と水谷）

役者の芸だけで見せる芝居で、他愛のないものだ．面白いといふだけで終つてしまふので後にカスさへも残らない．

もつと、胸のもたれるやうなシツコイ芝居がみたいものだ．

たゞ花柳の芸妓には、色気の外に凛とした気品があつた。

花柳だけは何か「高い」ものを欲しかつてゐる役者のやうに思ふ．